

『裾野市史』

第二卷

資料編

古代・中世

別冊付録

中世系図集

系

図

集

系図目録

- 一 大森系図(抄出) 乗光寺所蔵
- 二 乗光寺日牌過去帳(抄出) 乗光寺所蔵
- 三 大森葛山系図(抄出) 浅羽本系図
- 四 葛山家譜 甲斐叢書第八巻
- 五 仙年寺過去帳(抄出) 仙年寺所蔵
- 六 葛山御宿系図 藤曲孝明氏所蔵
- 七 北条系図(抄出) 小田原編年録
- 八 武田源氏一流系図(抄出) 甲斐叢書第八巻
- 九 今川系図 今川記
- 一〇 有井高田系図(抄出) 有井陽一氏所蔵
- 一一 高田氏歴代伝記(抄出) 有井陽一氏所蔵

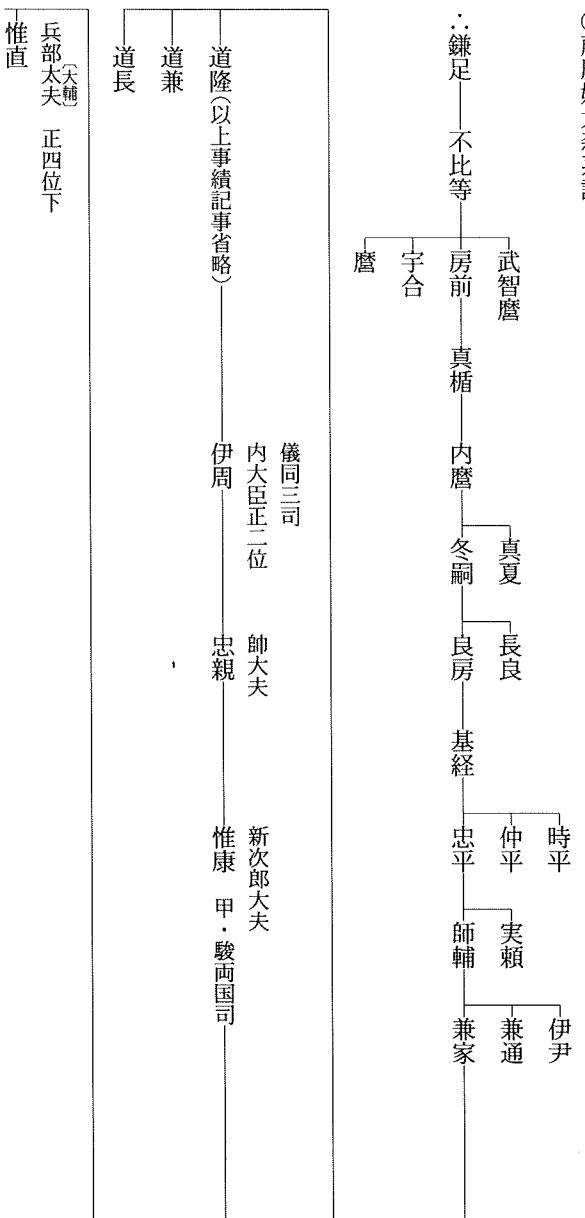
1 大森系図

一 大森系図(抄出)

○秉光寺所蔵
○小山町生土

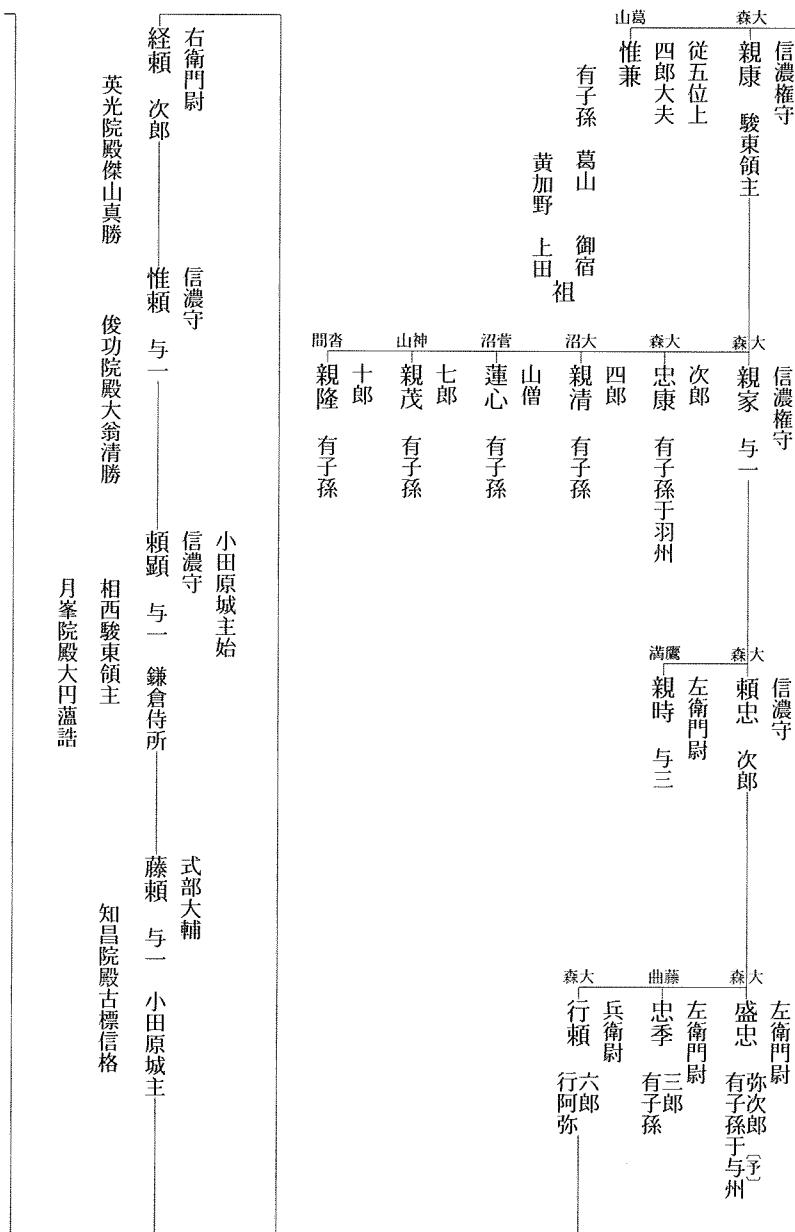
天兒屋根尊鹿島・春日
大明神
苗裔

○藤原姓大森系譜

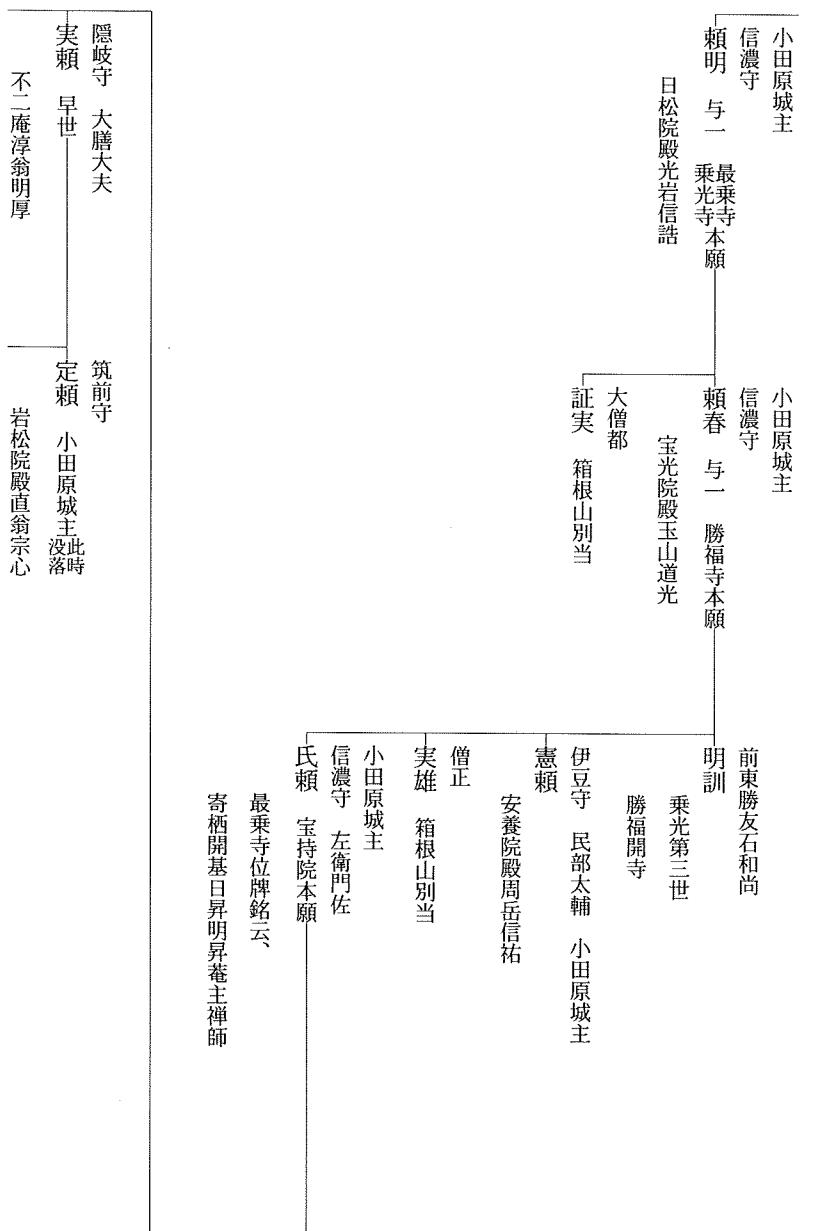


兵部太夫(大輔)
惟直 正四位下

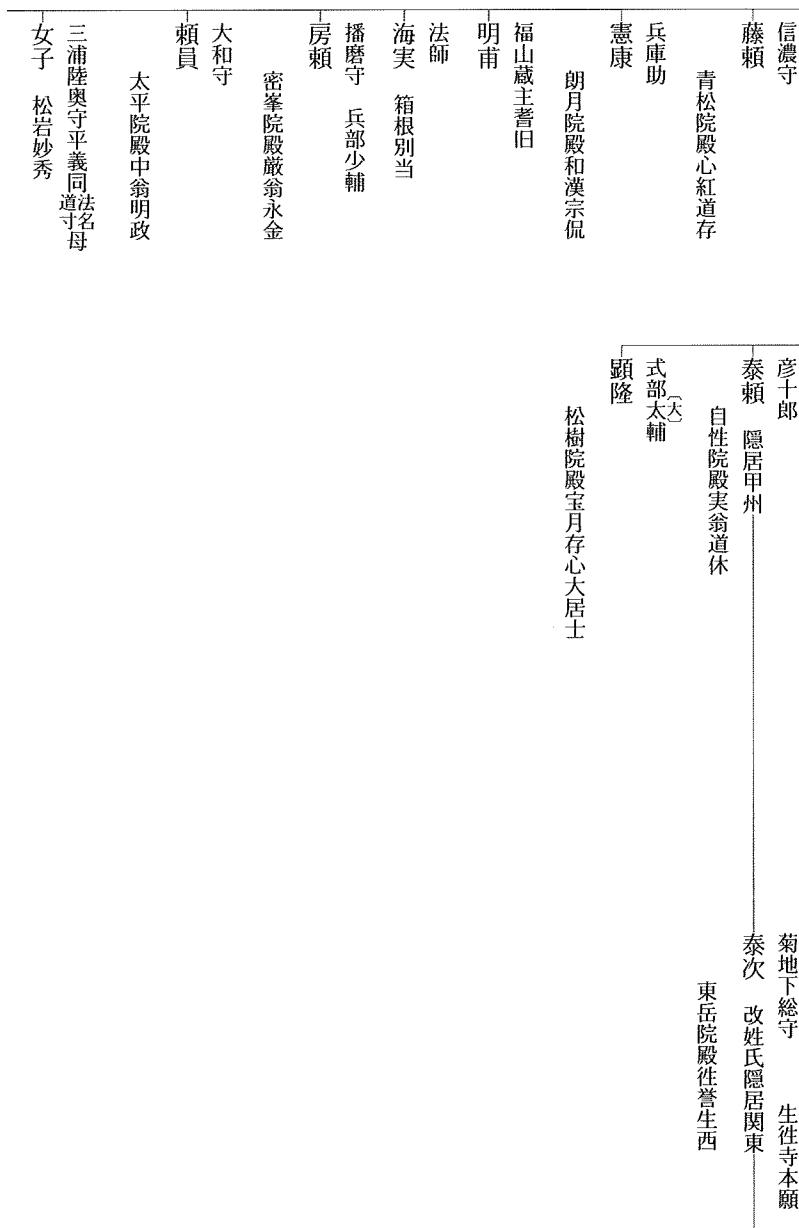
1 大森系図



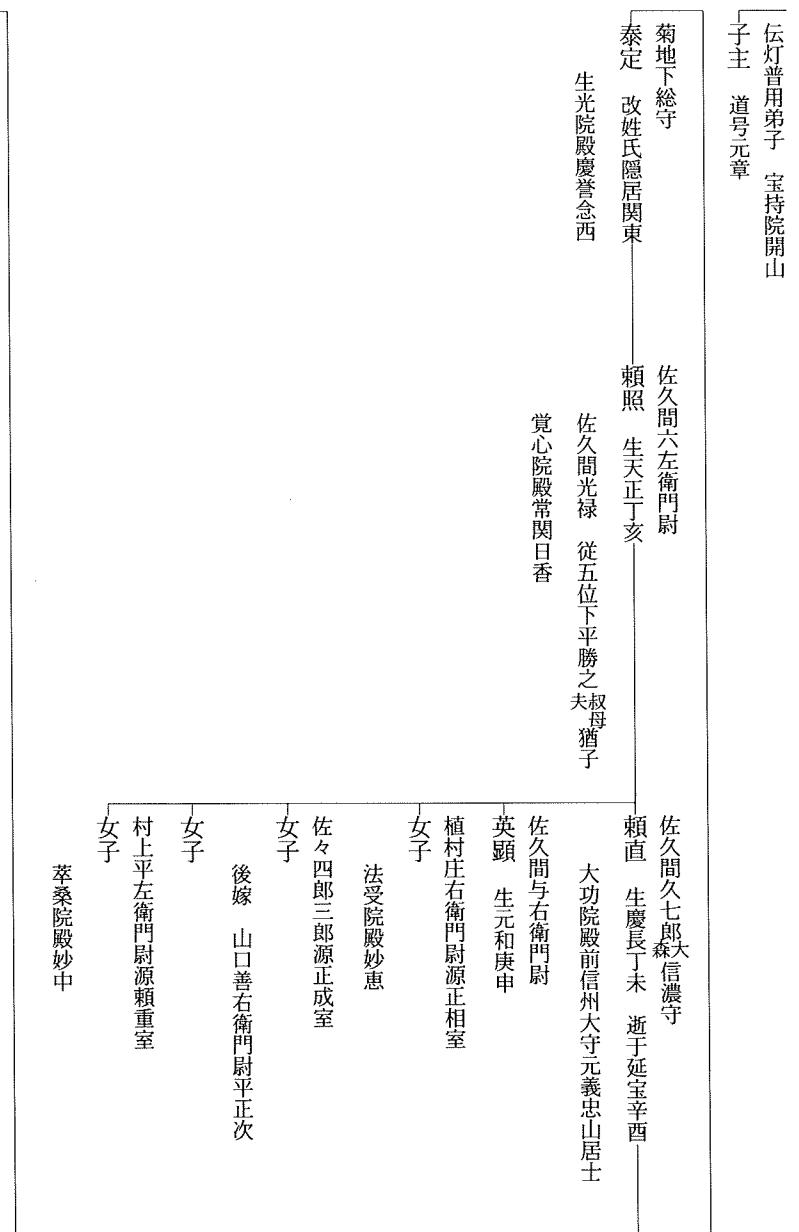
1 大森系図



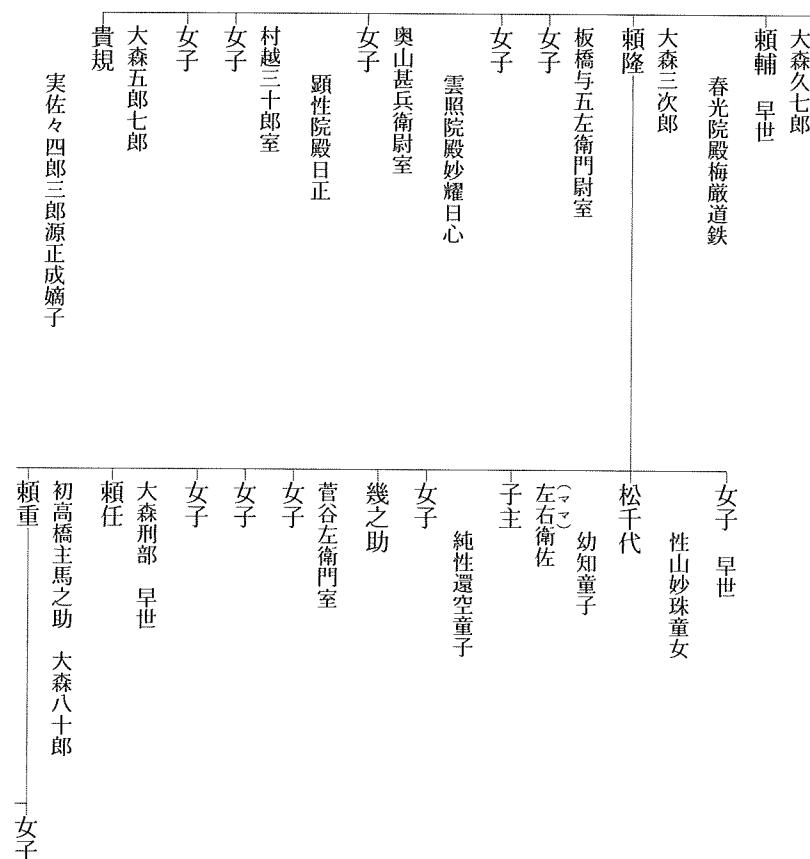
1 大森系図



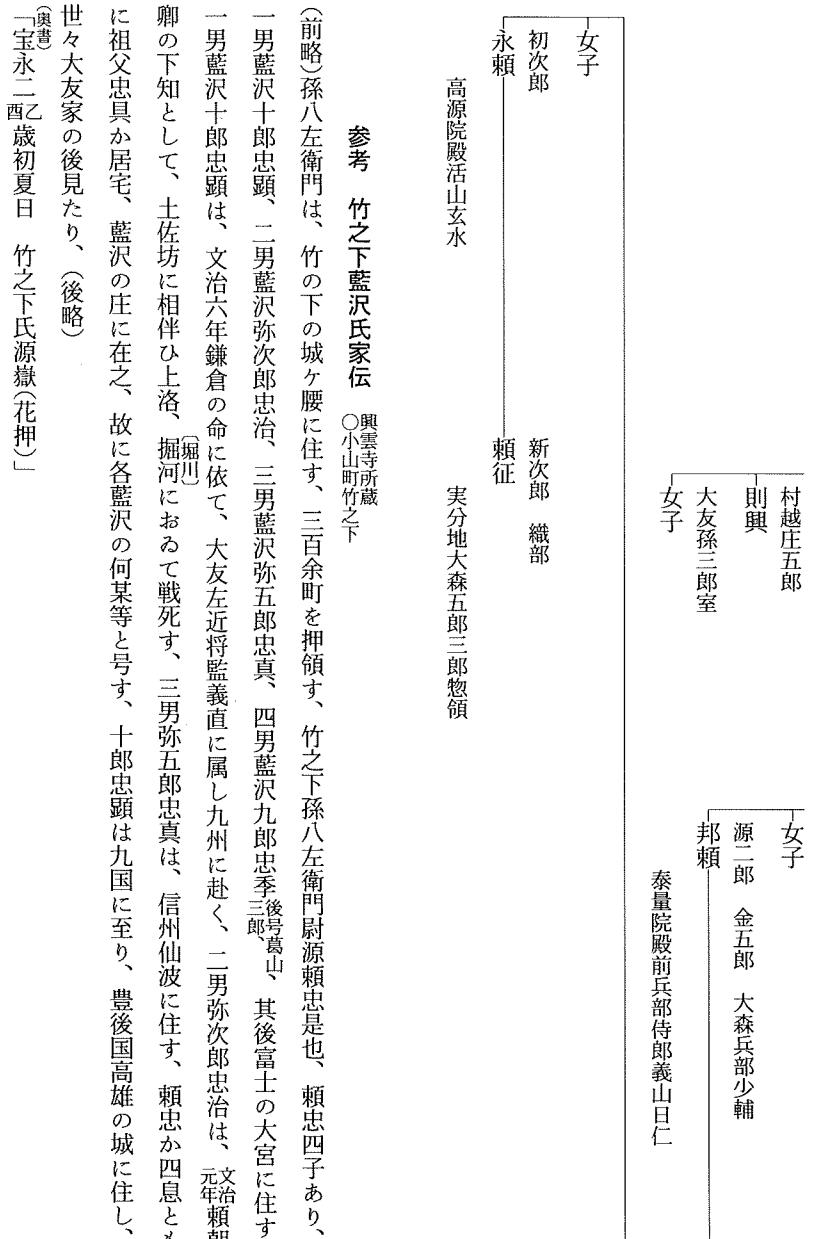
1 大森系図



1 大森系図



1 大森系図



○大森頼忠子忠季が、葛山三郎と号したことがみえることにより、参考として掲出する。

二 乗光寺日牌過去帳(抄出)

○乗光寺所蔵
○小山町生土

(表紙)

駿州御厨 生土邑

乗光寺

過去帳 全

夫以三界六道之衆生者、生死浮沈故、上覓大世尊、下遺追福作善之軌則、記前亡後亡名字簿上、供養香華燈明飲食、称念
仏号總持金文、功勳多々信、尽法界一切之含識、還元反本之要洛矣也、

駿河国駿東郡御厨生土村

乗光護国禪寺

(一月)

青松院殿心紅道存禪定門

文龜三癸亥十一月

大森信濃守(藤頼)

(十四日)

2 乘光寺日牌過去帳

開基本願主日照院殿光岩信誥大居士 應永十二乙酉九月卒 前小田原城主大森信濃守賴明公法名

(十五日)

当寺開山際庵明聽禪師 應永壬午四月 世寿八十一歲

(十六日)

当山三世外峰明雲和尚 應永三十二乙巳年正月

大乘院殿蓮室是妙大婦

應永二乙亥九月 大森信濃守_{賴明}
_{公室}

不二庵淳翁明厚大居士

文明十五卯七月 大森隱岐守_賴
_{公事}

(二十三日)

安養院殿周岳信祐大禪定門 應仁元丁亥三月 大森伊豆守憲賴公

(二十六日)

当山大檀那寄祐庵主日昇明昇禪師 明應三甲寅八月 大森信濃守氏賴

(二十八日)

当山二世友石明訓大和尚禪師 文安元甲子四月

(二十九日)

宝光院殿玉山道光公庵主 永享三癸亥八月 賴春公大森信濃守法名

3 大森葛山系図

三 大森葛山系図(抄出)

○浅羽本系図
四〇卷
○東京大学史料編纂所架巻賜贈写本

大森
葛山系図

天兒屋根尊二十一代後胤鎌足内大臣大織冠、天智天皇白鳳八年、改中臣姓始賜藤原氏、

兼家

道隆

伊周

忠親(以上事績記事省略)

従一位大政大臣

法興院入道殿

中関白 内大臣

師^(師)内大臣

道兼

道雅

道長

^{〔太〕}
大政大臣

閔白右大臣

雅康

伊勢新一郎大夫 或高橋殿 三河国高橋庄領主故号、母実範三位女、外戚伯父伊勢權守令養育之、伊勢權守八尾州熱田大宮司尾張貞基之贊、熱田大宮司之父也、雅康者甲斐・駿河両國務也、妻少將内侍之養君御領故、大森・葛山先祖、

3 大森葛山系図

雅直

正四位下 本雅成 兵部大輔 童名鹿那王 大御堂 御乳母子同御内兒也、母能登守女、白河院内侍、仍少將内侍ト云、仁和寺御室都芳門院御乳母、雅直不退在京不見田舎、無子故一腹同姓舍弟雅兼養子云々、所領并家文書等讓雅兼、又成道大納言為養子、成道ハ佐野次郎大夫兼之父也、

親康

信濃權守 本定康 本姓藤原改平姓、勢州住人佐和田判官相模守業房之妻丹後局、号淨土寺之二位高階榮子、依相親為養子、故改姓平氏、業房子中納言教成兄弟ト云、

親家

信濃權守 大森与一 権守入道 源大将家

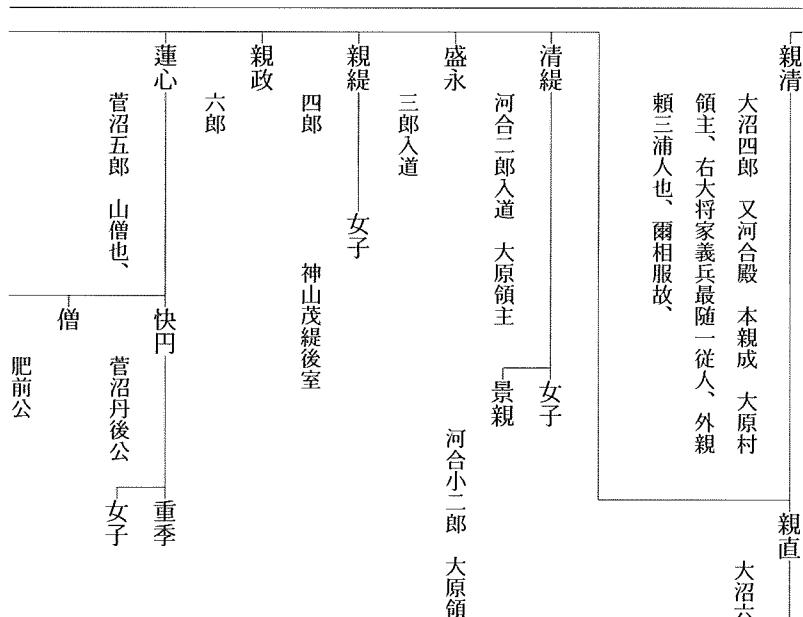
令奉公、男女子等、

忠康

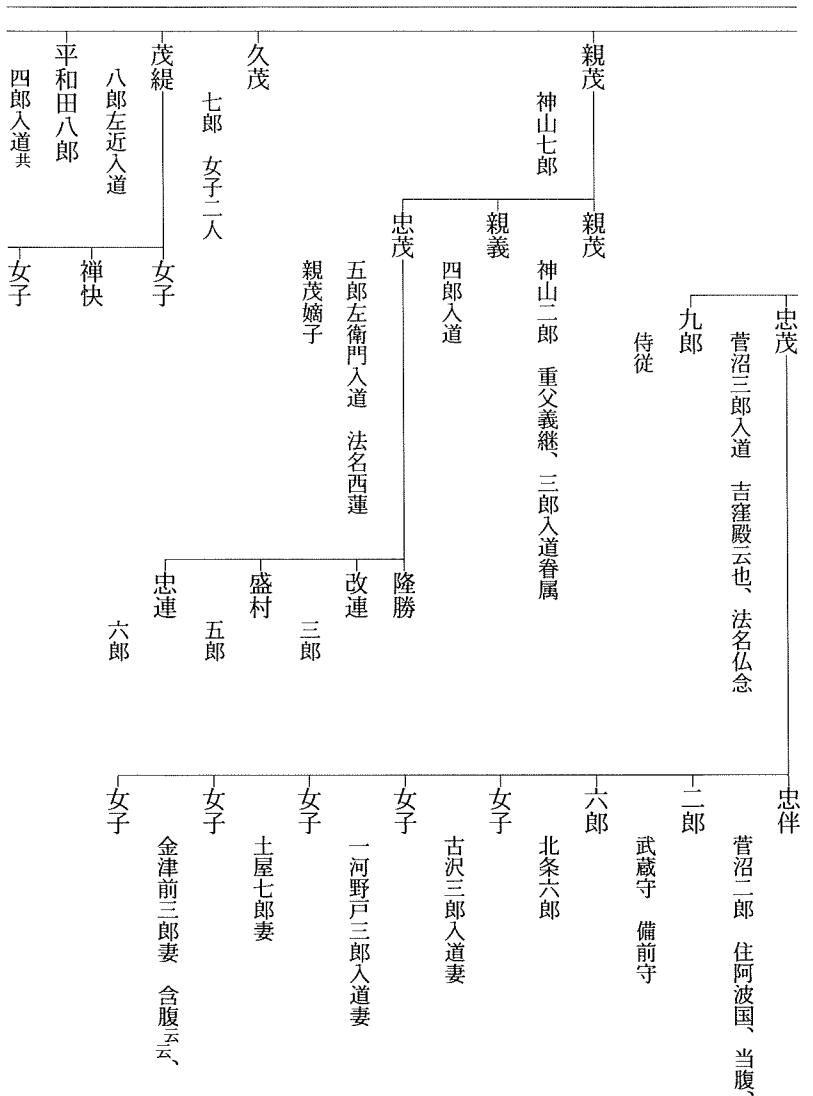
上野次郎

女子

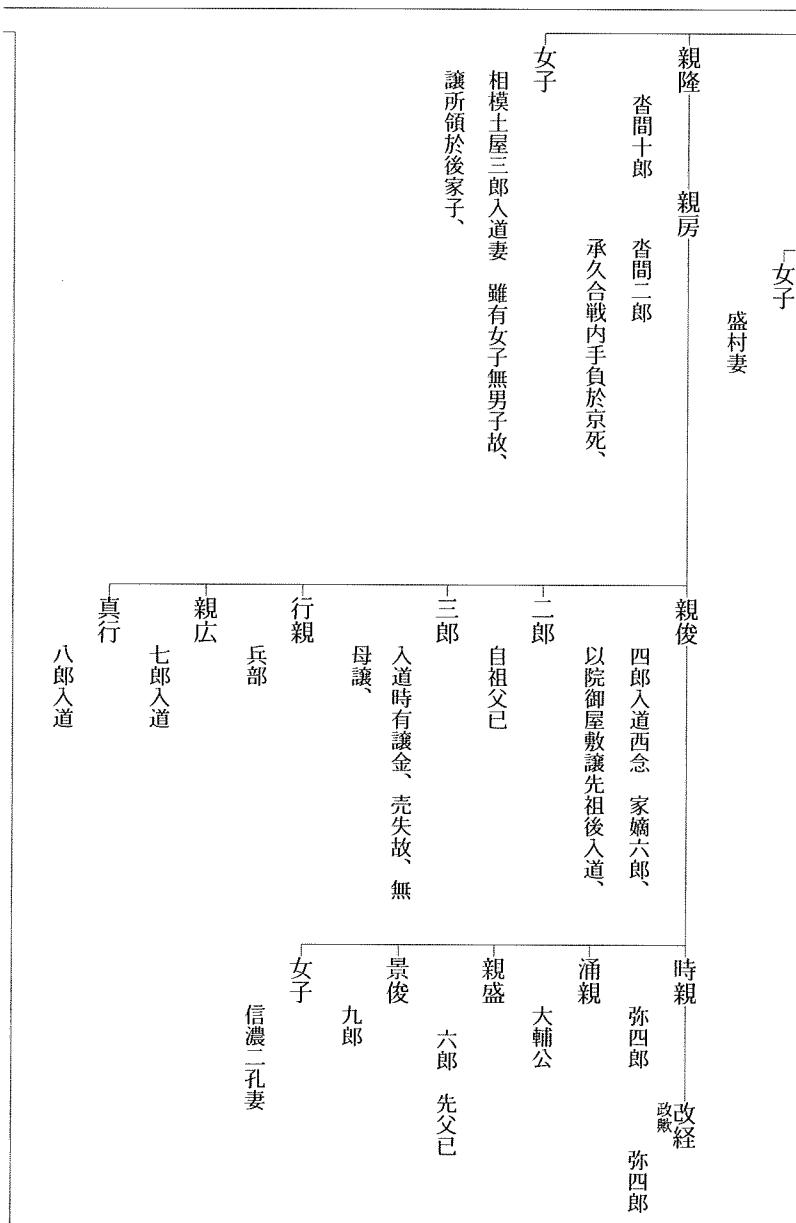
3 大森葛山系図



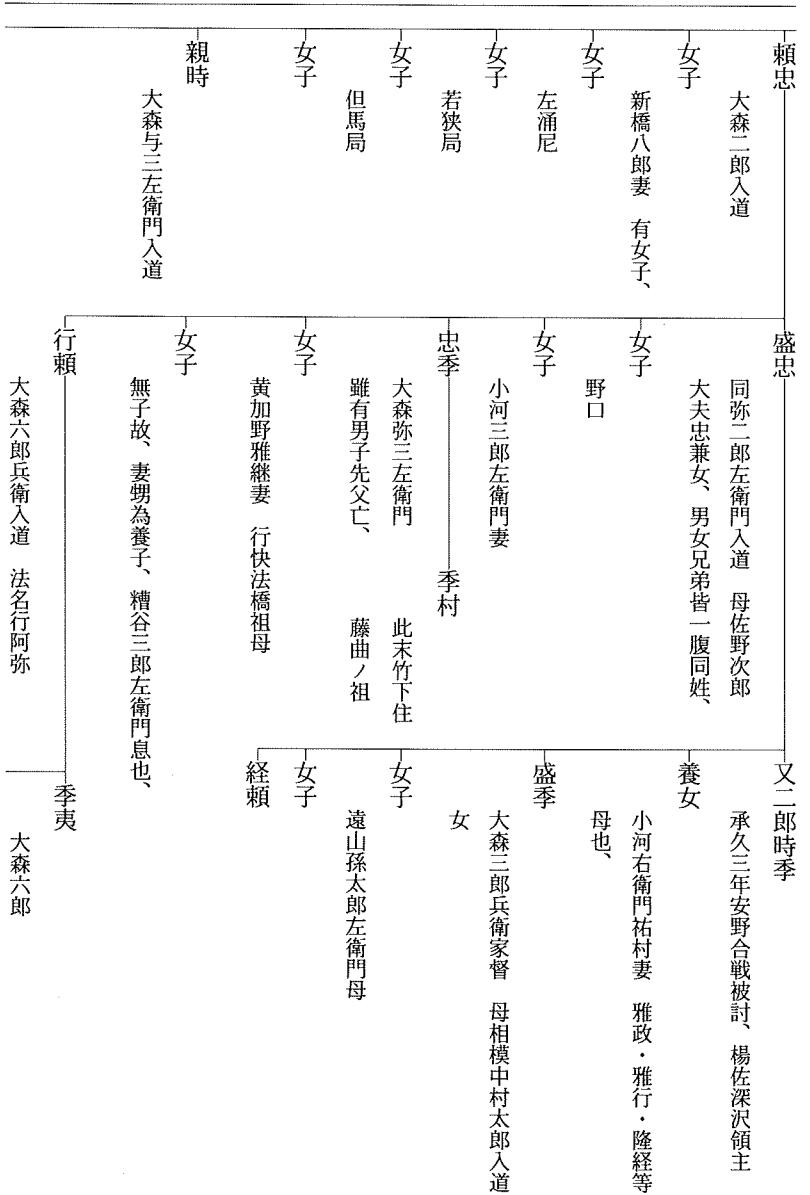
3 大森葛山系図



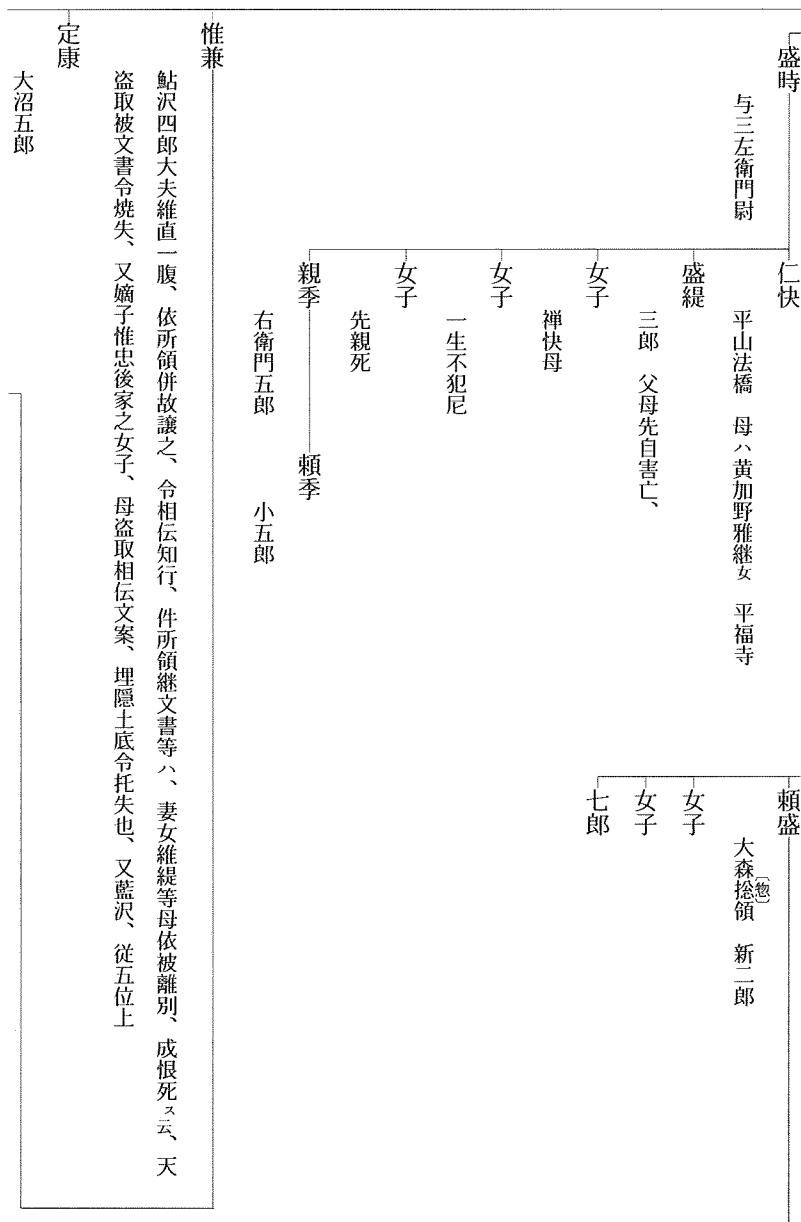
3 大森葛山系図



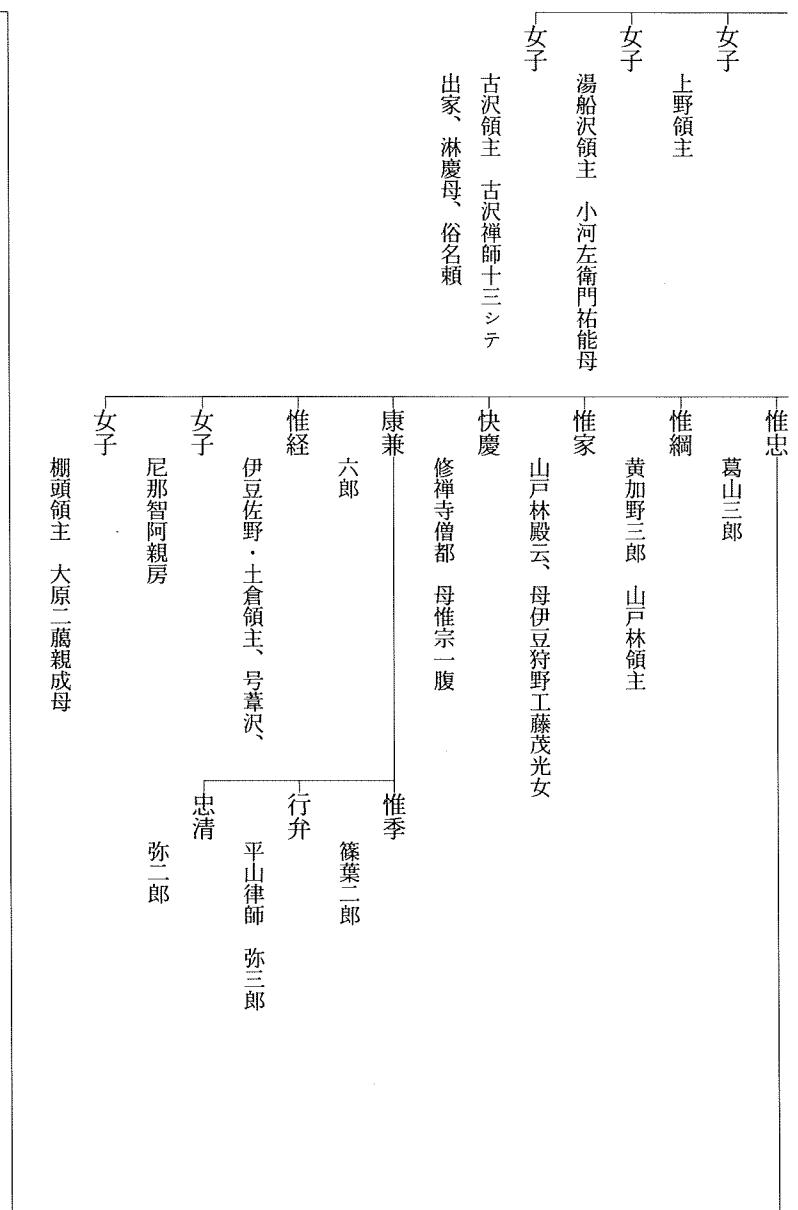
3 大森葛山系図



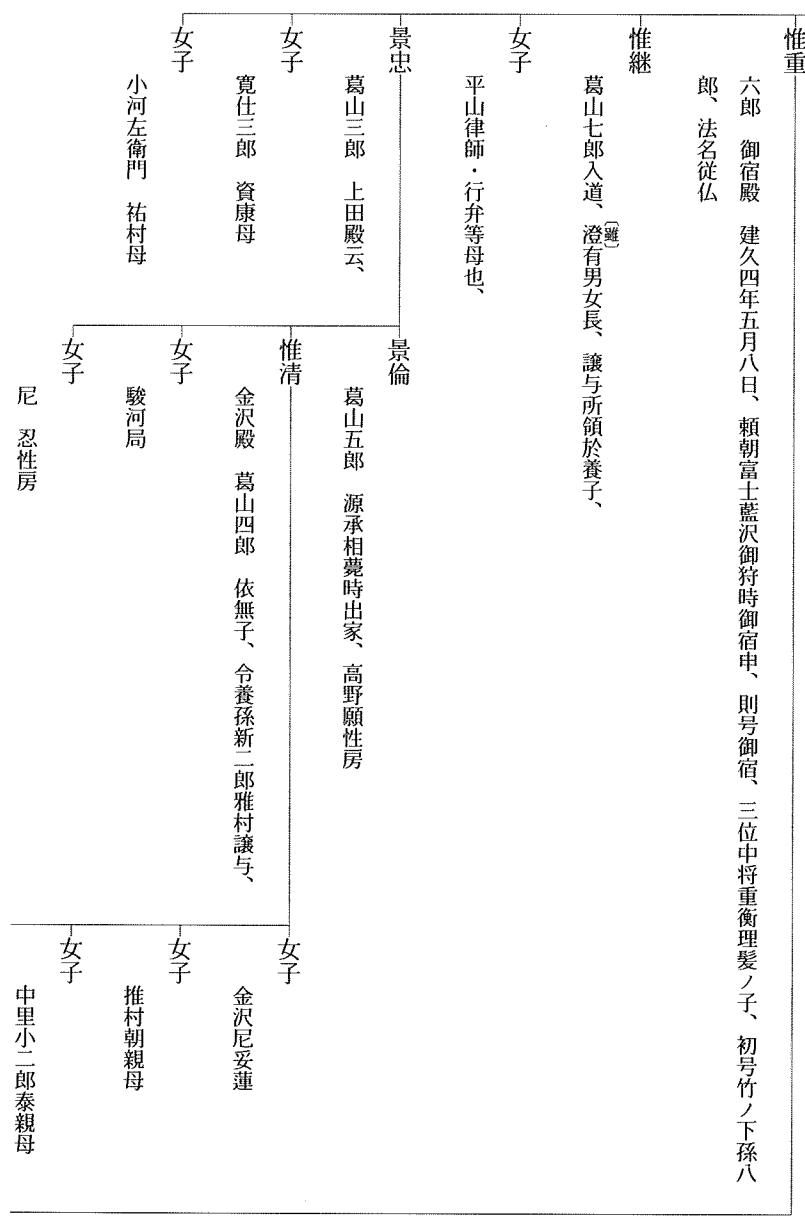
3 大森葛山系図



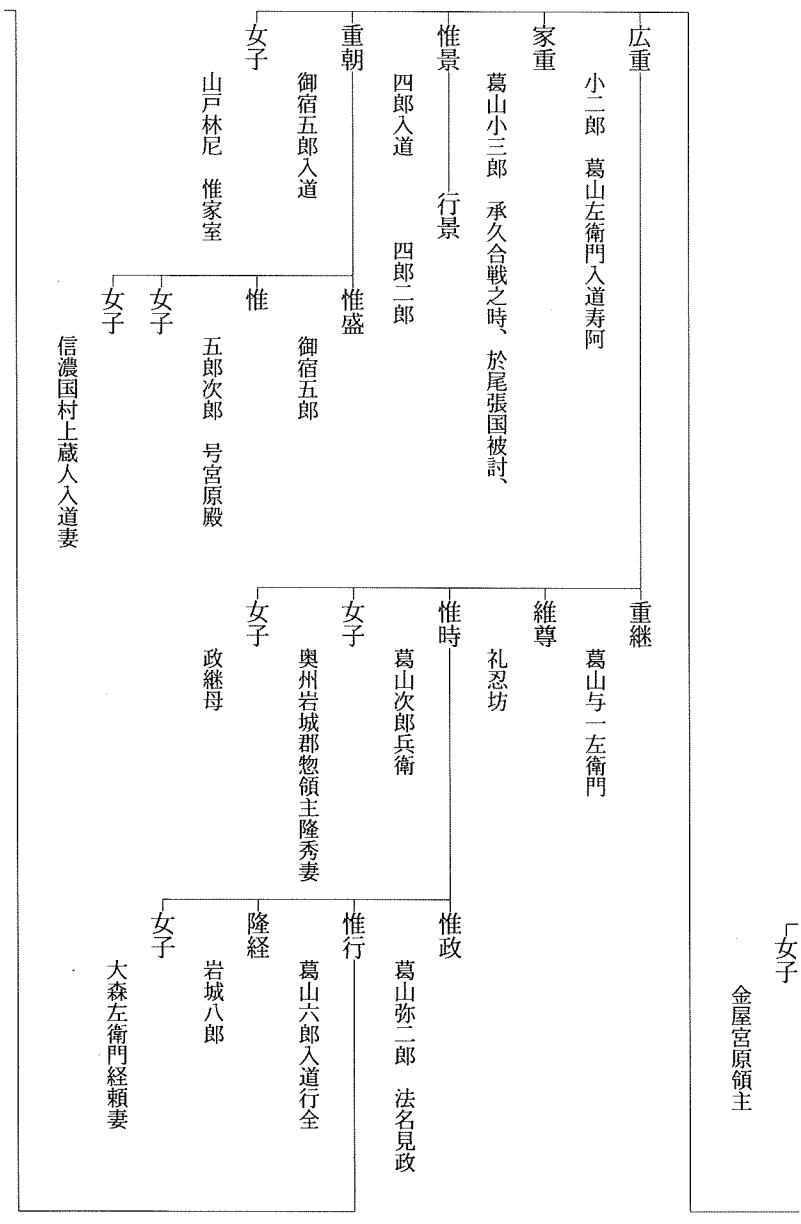
3 大森葛山系図



3 大森葛山系図



3 大森葛山系図



惟宗

惟定

惟吉

葛山次郎 左衛門入道

葛山備中守

同備中守

惟之

遠江守 明徳二年山名陸奥守氏清逆心之時、惟之山名氏清一味ノ契約アリテ、相州箱根湯坂ノ城ニ、家人由良・芳賀等百余人籠城ス、葛山遠江守ハ修禪寺ノ城ニ楯籠、山名於上方没落、湯坂城并修禪寺城・葛山城江、自鎌倉多勢襲来、不日合戦責落、葛山遠州家来三百人討死、葛山至浮嶋ヶ原雖落來不叶、主從十三人自害、悉滅亡ス、家人芳賀左衛門ト云者馳來、同及自害処ニ、遠江守内室懷妊ニテ、当月産月ニアタル、内室只今及自害死トイヘ共、懷中末タ動ス、芳賀左衛門則腹ヲ破リ其子ヲ取出、山中ヘ行テ、私ノ女両人ヲ付置養育之、八歳ノ年駿府ヘ相異テ、今川民部少輔殿ヘ奉リ、号葛山小太郎惟重、後改佐渡守、其子播磨守元重、猶属今川而為近臣、播磨守無子而、小田原北条先祖伊勢新九郎入道長氏ノ末子ヲ請堵、令繼家督備中守氏元ト号。

惟重

元重

葛山小太郎 佐渡守

播磨守

「氏元」

備中守 実ハ小田原早雲寺ノ末子也、女子三人アリ、永禄年中駿河今川氏真ト甲州武田信玄ト不快ノ時、自信玄謀ニ、葛山備中守方ヘ信玄駿府発向ノ節、氏真ヘ令逆心、謀叛アラハ以氏元駿府ノ可為屋形由令約束、氏真没落ノ後信玄令押領駿州、葛山方ヘハ無忠賞、依之備中守述懐而、信州諏訪在番之時、小田原ヘ令一味又逆心、遂ニ於諏訪為信玄被誅畢、葛山城御宿竹下ノ与力・同心ヲ備中守息女ニ附置、其後信玄ノ子息以信貞為聟、名跡号葛山十郎義貞、此十郎又兄勝頼ヘ令逆心勝頼ヲ亡ス、雖然天正十年三月於甲州善光寺葛山十郎終誅伏、

「信貞」

葛山十郎 号義久 天正十年三月 於善光寺被誅、号陽春院瑞香淨英、

「行頼子」

「惟時」

「頼頭」

「藤頼」

次郎右衛門尉 信濃守
法名真勝僧山

「信濃守」

「信濃守」

法名清道 号天翁

信濃守 鎌倉侍所

式部大夫(大輔)

法 蘭浩 号太円
法名信格 道号古標

「光頼」

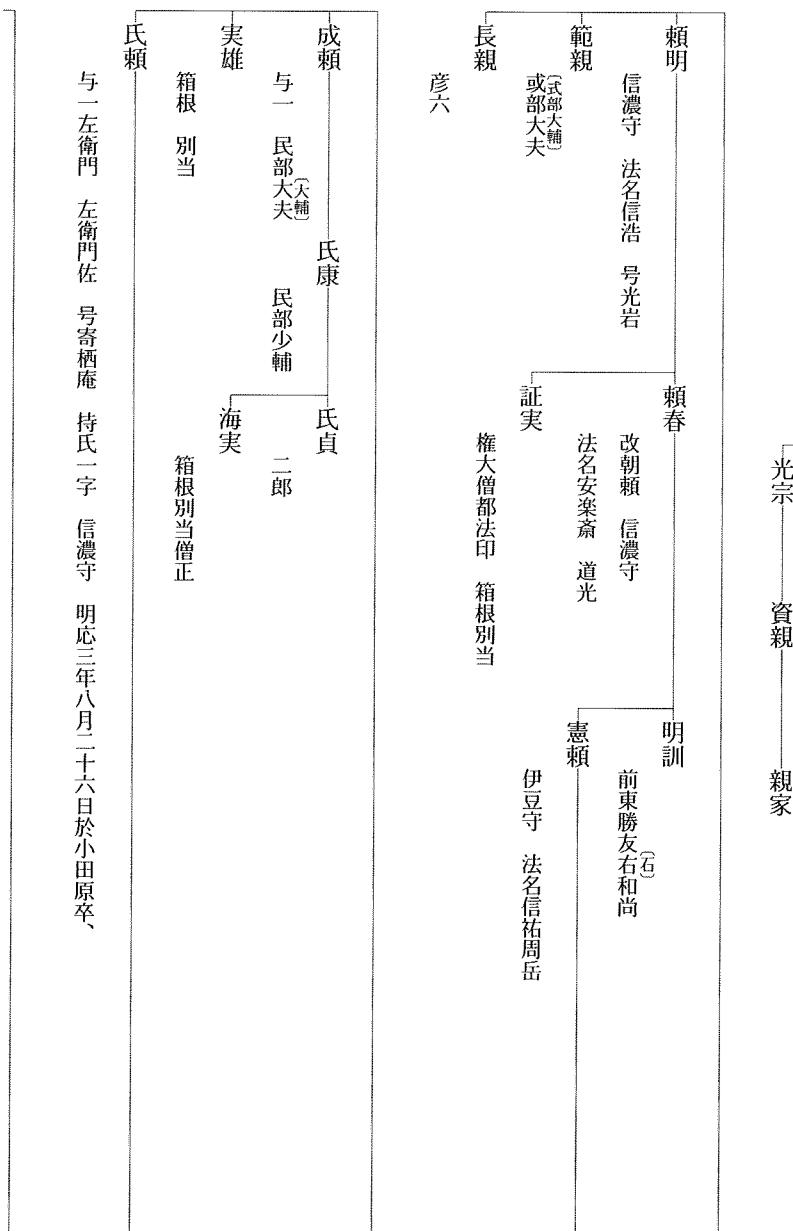
「時親」

「持親」

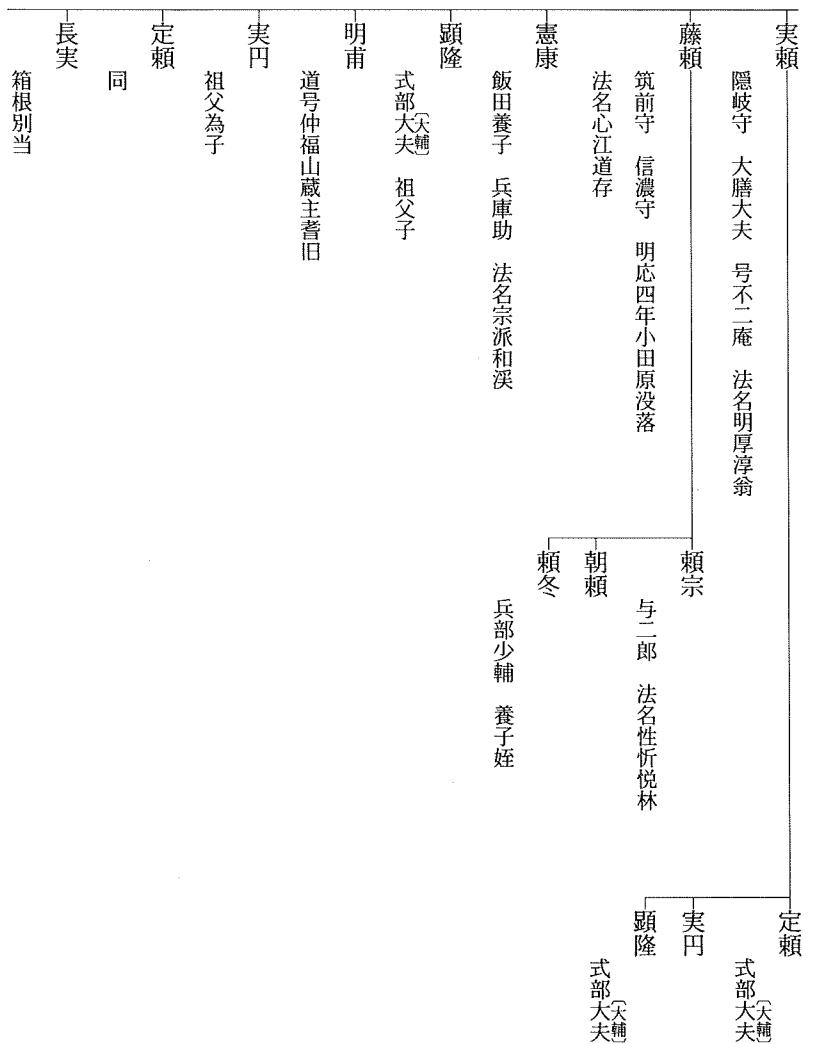
大夫 三河守
右馬頭

「持康」

右兵衛尉



3 大森葛山系図



子圭	伝灯普用弟子
房頼	
播磨守	兵部少輔 法名永全 道号嚴翁
頼員	兵部少輔
大和守	法名明政
女子	賴冬
上杉高救室	三浦陸奥守義同母 法名妙秀 号桂岩

四 葛山家譜 『甲斐叢書』第八卷

葛山家譜序

夫四海之廣，百氏之衆，其先只一人而已矣。今天下之人，舉□□□□，而若無貴賤以下同，然世降族多，其間有廢興之不一，盛衰之不齊，苟非譜牒別之，无以明其族之所枝，其氏之口，而與物不相遠也。所言譜者，非特著其世次爵祿，而參于人也，蓋欲以考善不善之所積驗，慶殃之所及，而為後世之龜鑑也。而其事至難，非立言之君子，則往往誣不可考之事，涉乎偽者亦多矣。譜豈容易可脩乎？我夫子云：夫孝者善繼人之志，善述人之事者也。若不能繼其志，不能述其事，則

為其子孫也、果何益乎、葛山之先出手大織冠、其後分為候、今復降為士、因以鎌足為所出之祖、以藤原為所称之姓、雖然余曾祖御宿監物友綱者葛山播磨守綱氏子萬山為武田一房、復姓於源、顧漢家之彝範本朝之恒規也、伯陽之先姪姓、而後号理氏又改李宇、広元之始中原而改大江、伝來裔、匪有先蹤哉、余雖非立言者、使後世之觀者、知其身之所出、与其氏之所受、而有考善不善之慶殃、則寧免禽獸艸木之歸云、時寛文十二年壬子、秋七月朔日、洒筆於 武江 城下為此一軸、奉納甲陽盛刹惠林禪寺、仰冀當家累代之覺靈、假一山回向之力、而期至於禪寂無為道場耳、

儒医侍教生 板坂順德菴宗実 鶴首拌書

一本者、納高野山引導院小坂坊、是武田

源府君并門楣陪臣等、為位牌之地故也、

葛山家譜

○家之紋、庵之内二頭舞鶴、近代用菱來、以武田門葉也、

・帥内大臣伊周――

大織冠十三代之正統、中閥白道隆嫡男也、母從二位高階業忠女、号高内侍、

一条院正曆四年任内大臣叙正一位賜內覽兵杖、長德二年四月在緒左遷九州、被移太宰權帥、同三年四月赦免帰

〔洛〕 離 寛弘五年准大臣貢、賜封戸号儀同三司、同七年正月薨、三十七歲、

連枝凡六人、二山井大納言道頼、三内藏頭頼周、四中納言隆家、五大僧都隆円、六定子立中宮、七女子

〔公卿補任永延元十月十七歲人頭左近衛少將正五位下〕 時歲十四、同二年正月七日從四位下

忠親

久安者人王七
時即六代近衛院
代隔五年也、

伊周公之三男、左衛門佐從五位下、公卿補任久安六年五月廿四日、補正五位下歲十九、余考之久安之号未見不審、与家伝之旧譜不合、山科前中納言兼内藏頭言繼卿自筆之本也、不知孰是官任此外不見、左京太夫道雅大和守顯長之弟也、

大森
之先

△維康

祖

忠親之一男也、新太夫平康三年八月被補甲斐・駿河兩國々司、任甲斐守叙從四位下、

親康

大森信濃守 始称大森、子孫於今候、

征夷大將軍家綱公幕下、号大森信濃守、其先嘗主相州小田原之城云、与北条早雲戰而敗軍、終隨彼麾下、

今又後葉浴、

大樹之仁沢訖

△維兼

葛山駿河守 始号葛山、自是当家世々城駿州葛山二十二代、至葛山十郎信貞令落城、殆沉淪畢

維忠

相模前司元傳

興中

維正

竹下孫八左衛門 試住相州竹下、故有此名、治承三年 月 日在向背平家被配流紀州丹生之屋、同四年右武衛賴朝於豆州被舉義兵之由仄聞之、密改姓名而出奔于勢州、稱祠宮後胤、号長江威人大中臣賴隆下着本国、為武衛竭兵略、平氏不知之云、

伝云 武衛先催相豆家人、欲發旌旗、暫儲御宿館於竹下草屋將士臨飢渴、馱餉宛千金、武衛快啖之余賜甲冑利劍、号家名可喚御宿者、息男一人奉扈從、兄十八、弟十七、

建保六年三月 日前征夷大將軍実朝公任右大臣、拜賀供奉之除目、叙從四位上任兵部權大輔、号藤勾當、是故將軍家近臣而以為第一宿老也、時歲七十二致仕之齡而任官、時之眉目也云々、

覺□

維長

聞性房阿闍梨 豆州走湯山住侶維正兄也、一名文葉坊、右幕下之祈師也、

葛山又七郎

		維重
中四郎	治承年中隨逐武衛、尽戰 忠石橋堀口等最經艱難殆北条佐々 木而四十六騎逞兵也云々、	
女子	北条平六廉仗時定妻 維重姉也、	
維平	中八 是亦四十六騎之党也、	
女子	佐々木太郎重綱妻	
		綱高
		小字者重寿丸、葛山太郎左右衛門尉從五位下承久一戰之節、蒙使宣旨、 宇多天皇第四王子、一品式部卿敦美親王七代、佐々木源三秀義四男、四郎 高綱嫡子、太郎重綱子也、建仁三年山門堂衆追罰時、重綱於前登沒命 訖、于時重寿丸母者維重妹也、維重无男子、養育重寿丸改葛山太郎綱 高、令繼遺跡、又改維綱、
維高	葛山小次郎維重実子也、立次男、承久之戰功任左兵衛尉、于時歲十七、	
賴顯	大森信濃守経時養子継大森、	
駿河前司	名乗不見	
	御宿兵部大輔、属城入道縁、弘安八年与泰盛同討死、六十一歳	
女子	今川左兵衛督満貞室	

4 葛山家譜

光綱

備中守 弘安二年落飭、歳四十二、従五位下

維光

式部少甫輔従五上 従時村上洛住京都、

光信

足柄判官代足柄ニ在城、

種綱

貞治年中基氏与官軍戰、賜夜討之大將、
与平一揆爭前登而移時、因之夜軍不克

進兵、退鎌倉基氏怒而討種綱云々、

太平記卅七之評伝委、

備中守従五上 母今川上總介義富娘

真咲

僧也、

完綱

左近將監従六下 住鎌倉被加評定云々、

伝本曰此間不
分明、追可考

女子一人

明訓

繼大森 信濃守頼顥

賴春養子

種春

備中守従五下

○破線は補った。

応永元年春依病痼出家、終為僧、

東勝寺住侶友古和尚也、

忠永元年春依病痼出家、終為僧、

宗忠

播磨守 徒五下

綱忠

彈正忠

隆綱

但馬守

女子

吉良義諦室

義隆

伊豆守足柄在城、

說齋

駿州臨濟寺住侶 達武略、今川義元之隊將也、

綱春

葛山播磨守 母者冷泉人納言為和卿之女、亞相避亂終葛山城、

今川者駿遠之太守、而永德之比漸奮武威、故心其麾下而盡微功、至綱春九代聊與義元及鉢楯而交戰、終為義元死、
 笠寺籠城五人之内、最得武名、慶元通鑑·大坂來由記
三川御軍記等載之

元氏

備中守 与氏真攻戰无死利而於信州敗北、溺水而死、

甲乱記雖載之訛來、家伝云、兄綱春為義元被討了、因其宿意又攻氏真如左云々、

「綱清」

御宿藤七郎 後号左右衛門佐 此子孫無男子、女子一人其子又女子也、今号御宿存命、
義元賜勅狀三十六本、卒而葬保大院 駿府也、

東陽軒

甲州塙山之住侶也、

綱遠

御宿修理亮 隨北条之麾下、

友綱

小字者若丸母跡部越中守女、父播磨守兵死後、為孤在城葛山、信玄攻之、終落城而有武田幕下遂忠戰、于時歲十六、永祿三年壬申卯月廿日、葛山本領之外沒收之新恩十二ヶ所被宛行、併信玄之仁厚也、

御宿大監物手勢百一拾騎

軍鑑書葛山信玄六男、養十郎信貞為名跡、與葛山本領、二男若丸越前守後号御宿讓新恩之地、法名善養於信州病死、嘗達文武之學、又委醫術、是板坂法印饑倖軒宗慶伝家珍私要兩方、于今相統之畢、丹家之妙法也、

信貞

葛山十郎

武田源府君信玄之六男也、為名跡讓葛山本領、天正十年三月於信州兵死、歲十七

綱貞

若丸母長坂釣閑斎女

勝頼被宛行御宿之領地、如旧、

甲乱之後、応北条氏真之麾下而、於小田原抽忠節、号御宿勘兵衛、小田原没落後、仕越前黄門秀康卿、賜新一万石、
嘗依野元右近秀康卿事出奔越、元和年中応豊臣秀賴公之招而、於攝大坂竭兵術、与真田左衛門尉為両將軍、戰數雖下
手戟尽鎌折、終以自殺与首於野元右近畢、于時元和元年五月七日、

政綱

御宿源太 委医術而繼板坂法印之奧秘、後御宿忠三郎、又御宿忠左衛門、於上州藤岡病死、
任上總守源忠輝朝臣、

女子

号清雲 始川合氏妻、其娘号因幡、館林宰相綱吉卿之乳母也、

義綱

御宿源太

(義院)剃髮而号板坂頤神軒宗清、綱貞討死後改綱義院、養育伝医術母武者右衛門佐女、依田大井等之一族也、寛永十七

年叙法橋、

慶安四年四月十三日於武江病死、余于時七歳也、

義政

内山七兵衛尉 候 将軍家、

政秀

御宿善太夫 子一人出家人入淨土門、

頤神軒宗清子五人之内、一人女子早世子一人存命嫡男隱遁、其次一人適他家候
的々於武医相承余一人而已、系譜勘状佐々木綱切太刀等伝之畢、
館林宰相綱吉卿之幕下、家伝之

信次

葛山右近 与武田相模守信豊同討死、

女子

武田左右衛門佐室

○葛山昵近之一族芦田、保科、跡部、長坂、山県、三枝、横田、日向、大井、依田、小菅、森山、他家者
竹腰山城守、類葉太多矣、就中芦田下總・保科彈正兩人者越前守伯母聾也、

むらさきのゆかりもたへてあすまちの ちりにむるゝするのふちはら
かすならぬ藤のすゑ葉のとはかりに のこる春日の山の下風

従五位下行信濃権守信宏

剃髪号板坂頤徳宗実

寛文九年十二月廿七日 官位宣下予嘗候、

禁裏去歲下 武紅継先考之緒、

物有本末、欲正其支流、當正其水源、□番殖其枝葉、庶培其本根也矣、□我四代祖、宗寔信宏、正往古家系、間又具記其勲功、以永伝子孫焉、然祖父忠昌遇火災失之、父玄賀昌成患之、而雖求其遺書、終無得而卒乎、遺書曰、信宏正家譜三卷、一則伝其子忠昌、一則納高野山引導院小坂坊、一則納之甲州牧庄乾德山惠林寺矣、予謹承其言、登乾德山、請一軸、閱之則皆与遺言合矣、毫釐無違也、積年鬱陶散一時則予伸、大人之屈心、可謂孝道之端也、尚願明家系、正血脉、永伝子孫乎、時寶曆八年戊寅春三月、因以其事、記之、爾云、

長崎頤神軒玄貞 鴉首拜書

信宏

号板坂頤德菴宗寔

忠昌

号長崎頤神軒玄賀 有故以長崎為氏、

昌成

号長崎頤神軒玄賀 寛延二年巳十月七日死、

忠時

法名還松院欣營玄賀居士

長崎

号板坂養竹 享保十八年丑六月廿二日死、無嗣子、

豐

長崎玄貞

鼎鞅

女子

長崎玄亮

御番医坂実菴妻

「女子二人

伊勢之助

無声生

此壱卷者乾徳山恵林寺所藏葛山家譜也、
大正六年二月於惠山之小室筆寫了、

右以山梨県志編纂会本、謄写校合畢、

峠北 広瀬広一校

五 仙年寺過去帳(抄出) ○仙年寺所藏山

葛山殿系図

当寺在之葛山正系図一巻相納ル由来ハ、葛山家終ニ没落而後、上州ニ居住シテ百姓成ル、末葉至テ二子在之、一女家ヲ相繼キ、一男子ハ出家シ増上寺ニ入寺シ、学席増進シ檀林出世移転シ、伝通院ヨリ増上寺四十五世ニ成就畢、其砌リ此系図ハ相納ル、惜哉、暫住而当寺エ寄附面等功望不遂之、依之無其記已也、

増上寺四十五世大僧正成誉大玄天和尚

6 葛山御宿系図

葛山元祖治郎大夫維兼公大居士

年月未詳、宜以祭
二月十五日以ス

竹下孫八左衛門尉頼惟公大居士

正治二年十月十五日以ス
卒寿 六十五歳

徳蓮院殿玄道永心大居士

至徳二年八月二日
寿五十一歳卒ス

葛山備中守惟信公

元祖惟兼公ヨリ十代孫也、

光德院殿日実大居士

天文八年七月二日
寿六十九歳卒ス

葛山但馬守惟治公

維兼ヨリ十五代孫也、

芳陀院殿綱治三十五歳卒ス、葛山殿十六代孫

弘治三年丁巳年
五月七日

慈光院殿明智大居士

慶長十一年
三月廿一日

御宿大將監友綱公

高國寺城主也、元祖ヨリ十七代孫也、

六 葛山御宿系図

○藤原姓葛山御宿氏系図
○藤曲孝明氏所藏

○藤原姓葛山御宿氏系図

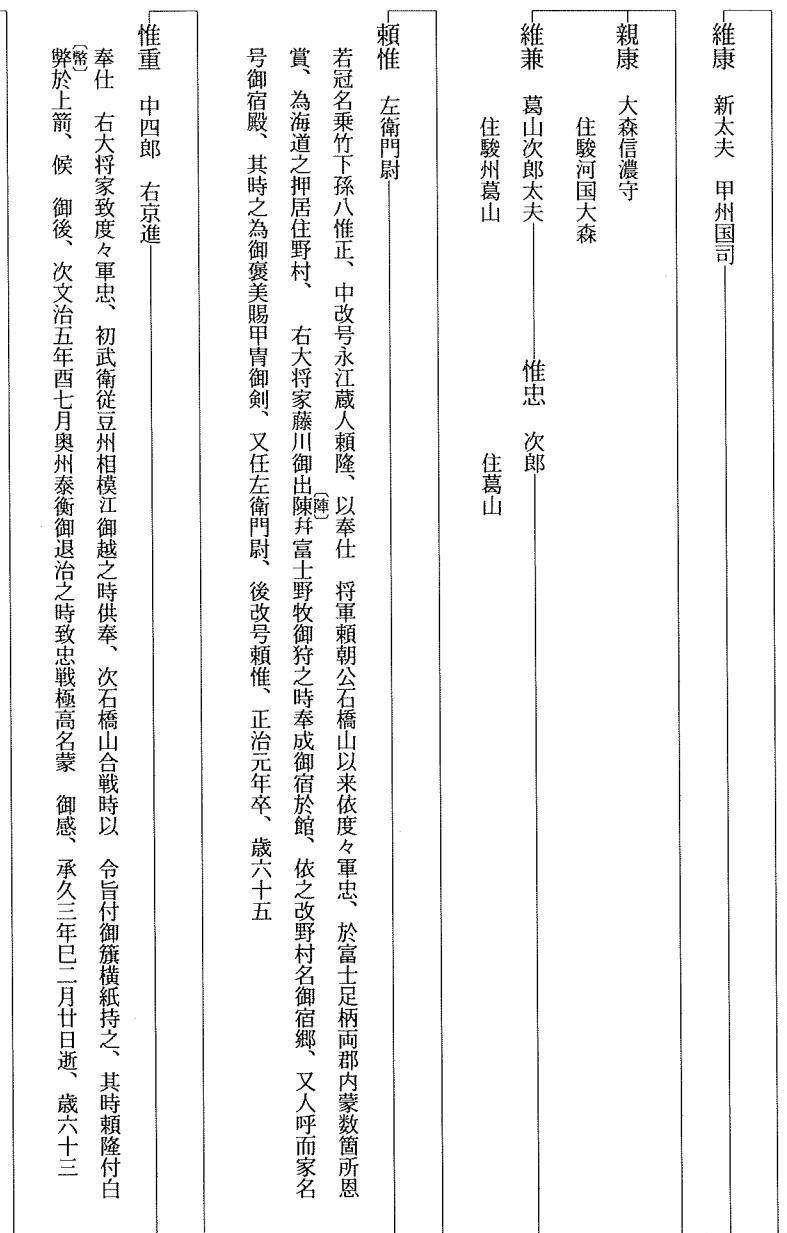
家之紋菴之内二頭舞鶴又二頭巴

●天児屋根御苗裔大織冠鑓足十三代

・伊周公 儀同三司内大臣 母高一位義忠女

忠親 左近少将

6 葛山御宿系図



惟連 次郎 宮内少輔

住葛山

候 関東將軍家、承久三年五月相從北条武州上洛、依有軍忠蒙御感、寛元二年八月十五日 將軍頼嗣公鶴岡御社參之時、
与千葉・佐竹等同着烏帽子直垂帶劍、入十一人之列而御車左右可供奉由以上意被仰付、尤所備子孫眉目也、建長五年六
月卒、歲七十一、号白性院殿蓮久

惟宗 太郎 織部正

候 将軍家、承久三年宇治合戦之時、討取敵一人付者絃袋蒙御感、正元元年末十月一日死去、歲五十二、法名淨蓮

宗連 次郎太郎 輜摩守

播磨

惟春

左馬助

候 将軍家、正安元年亥九月三日薨、歲五十九、法名

初候鎌倉 将軍家、後屬新田義貞、致度々軍功、觀

法雲

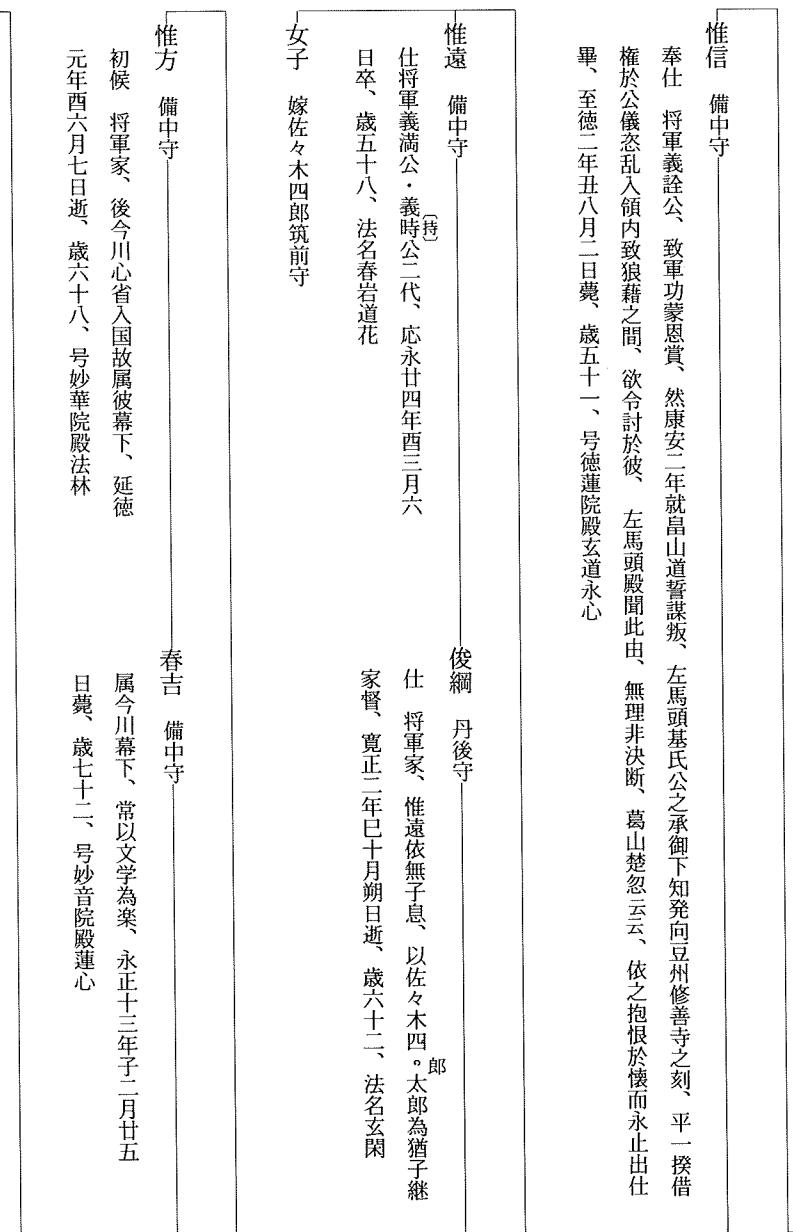
應二年卯正月廿八日逝、歲六十七、号雲松院殿水雪

居士

惟光 左衛門尉

属新田義貞、致度々軍忠、蒙數ヶ所恩賞、故足利家雖興隆其志猶在新田、依之觀應三年閏二月新田義宗起義兵之時、一族
同心引卒馳向西上野、同月廿日武藏野合戦手痛勦靡敵、義宗公之致御供到鎌倉、且奉仰東八箇国之官領之処、大将不運
而不令安堵之間、不達本意帰城本国畢、延文四年亥五月十一日卒、歲四十九、号玄光院殿窓月善白

6 葛山御宿系図



惟長 備中守

属今川家

信貞 次郎

此人者武田信玄公御子息也、備中守死去之後、依無一子而以此人令繼其家、故信玄家云御一門葛山殿此謂也、

惟治

但馬守

綱治

左衛門尉

播磨守

属今川義元公幕下、以甲州跡部越中守妹為妻、然此女美色婢娟於遠近無其隱、義元好色無道而欲棄之、

十九、号光徳院殿日実
属今川氏輝公幕下、天文八年亥七月二日卒、歳六

因茲楯籠御宿館引請今川勢及數刻合戰、敵人余多討取、其後殺妻子自害畢、于時弘治三年巳四月七日、

歳三十五、法名蓮勝

友綱

左衛門次郎

大監物正

九歳号丸若離父母隱居駿州相国寺、欲報父怨、義元聞之議討、依之永禄年中歳十三而忍到甲陽賴叔父越中守、仕 信玄公、
歳十六而川中嶋合戦始遂高名、其後致度々軍忠、取數通証文、駿州屬信玄公之御手之後、元亀三年卯月廿日本領之内賜御宿・千福・上田・菅古・棚頭・足洗・平山・内谷・焼津・丸子・油野・沢田十二箇所、被補高国寺城主預率人与百騎勢、
天正四年四月十六日 信玄公御葬礼之時入道号願神軒善養軍勝頼公為信長生害之後離領地、憑北条且令居在小田原、元來当家其姓以不卑人呼御客人云々、然处氏直又為大閻秀吉滅亡而后籠居上州藤岡逝、于時慶長十二年午三月廿一日、号慈光院殿明智

綱秀

勘兵衛尉
越前守

從若年天性剛勇而不學文道偏好鬪戰專事喧嘩、故父勘當之追出家、因茲初住小田原、中移住越前、後屬豐臣秀頼公任三百騎將、曾以片桐市正女妻之、依此緣將軍家康公頻雖被召、唯以無二心為義終不奉成應諾報答。^{元和}元年卯五月七日於坂小屋口向越前軍衆防戰討死、野元右近取其首、右近依此功賜一万石領知、

政綱 源太 忠左衛門尉

父友綱入道後令隱居幼稚而繼家督、猶高國寺城主、然甲州令滅亡、依之同父住小田原、北条又為大閣沒落、其刻義戰拋身命殆雖作折弓碎劍勢其將運拙而及生害竟終退出彼地、爾後且屬松平上総介殿、於信州卒、歲五十六、元和九年亥八月六日、法名実円

政秀

善太夫尉

維将

父沒後成孤受母養育、徐長仕京極若狭侍從泥家老末席、後有恨主君而退畢、

寛永廿一年申五月廿三日薨、歲三十三、法名智海院法泉

七 北条系図(抄出)

○小田原編年録
○国立公文書館内閣文庫所蔵

北条

高時三男
行

北条相模次郎

又伊勢次郎 幼名全嘉丸

龜寿丸

行氏

小次郎

時盛

小三郎

行長

新三郎

女子 駿州向敷地大窪山得願寺開基、徳願寺殿慈雲妙夢大姉ハ
今川義忠至北川殿也トトイヘリ、子氏親大永六戌六廿三卒ハ

長氏

初ハ伊勢新九郎、後入道シテ早雲ト号ス、

母 伊勢備中守貞国女

氏綱

千代丸 新九郎 左京大夫 従五位下

母ハ小笠原備前守女

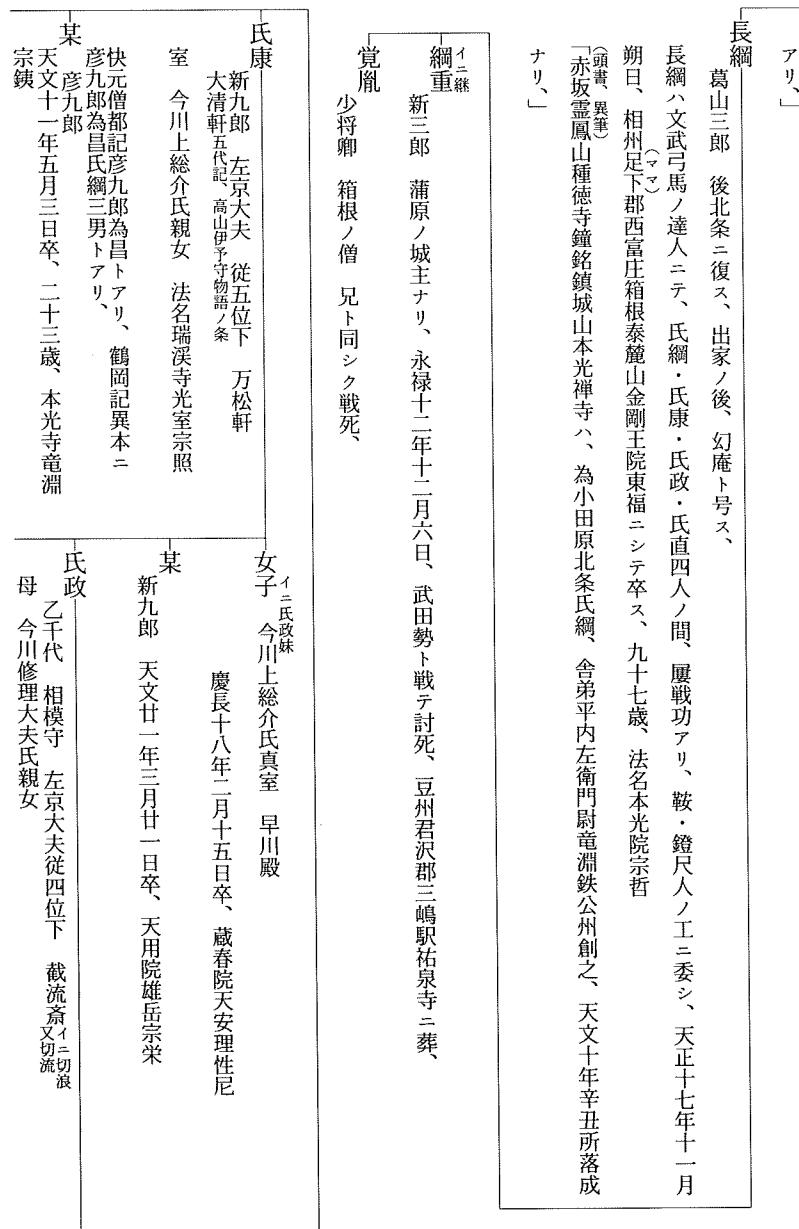
氏時

左馬頭 イニ助
玉繩殿ト号ス、

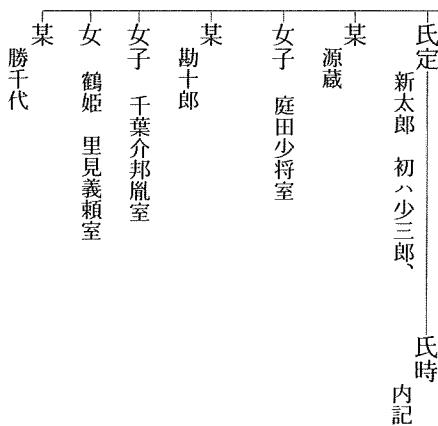
葛山備中守カ養子トナル、天文十一年寅ノ十月十八日卒ス、法号大虛院了翁宗達トイフ、
一関待伝云、二男氏時ハ駿河竹ノ下住人葛山備中守カ養子ナリ、依之駿河ニ留リ今川殿ニ仕フ、三男ハ箱根ノ別当ニ契約

頭書異筆

7 北条系図



8 武田源氏一流系図

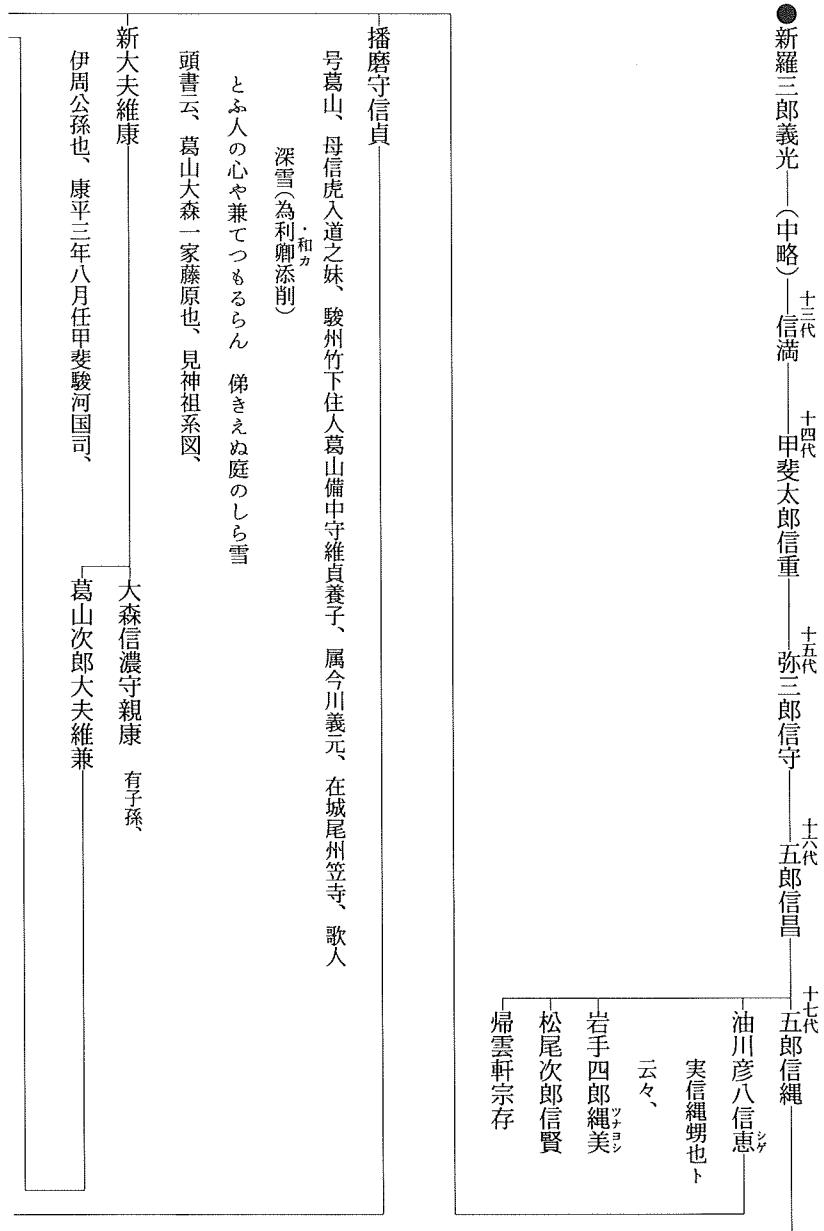


○各人名の事績記事については、適宜省略した。

家紋 榛^{スジクロ} 黒^{ウロコ}
三鱗^{ウロコ}

(後略)

8 武田源氏一流系図



「次郎維忠」

竹下孫八維正

有故改長江藏人頭頬隆、子孫皆称

葛山、中四郎維重、中八維平其男也、

御宿藤七郎 左衛門佐 属今川有武功、

源左衛門信友

某

御宿又太郎

於信州海野、為村上被討了、

母松田尾州妹、在小田原笠原新六家、
天正九年十二月於戸倉打死、十六歳

彦三郎信連

永祿四年九月十日、於川中島、為長尾彈正被打、

女子

仁科五郎信盛、葛山十郎信貞母也、

女子 穴山養女

頭書云、武田七郎信吉家康公御子也、号万君、立穴山名跡、賜常州水戸二十一萬石、母油川信惠女、慶長八年九月廿

一歳ニテ逝世、見松平家譜、

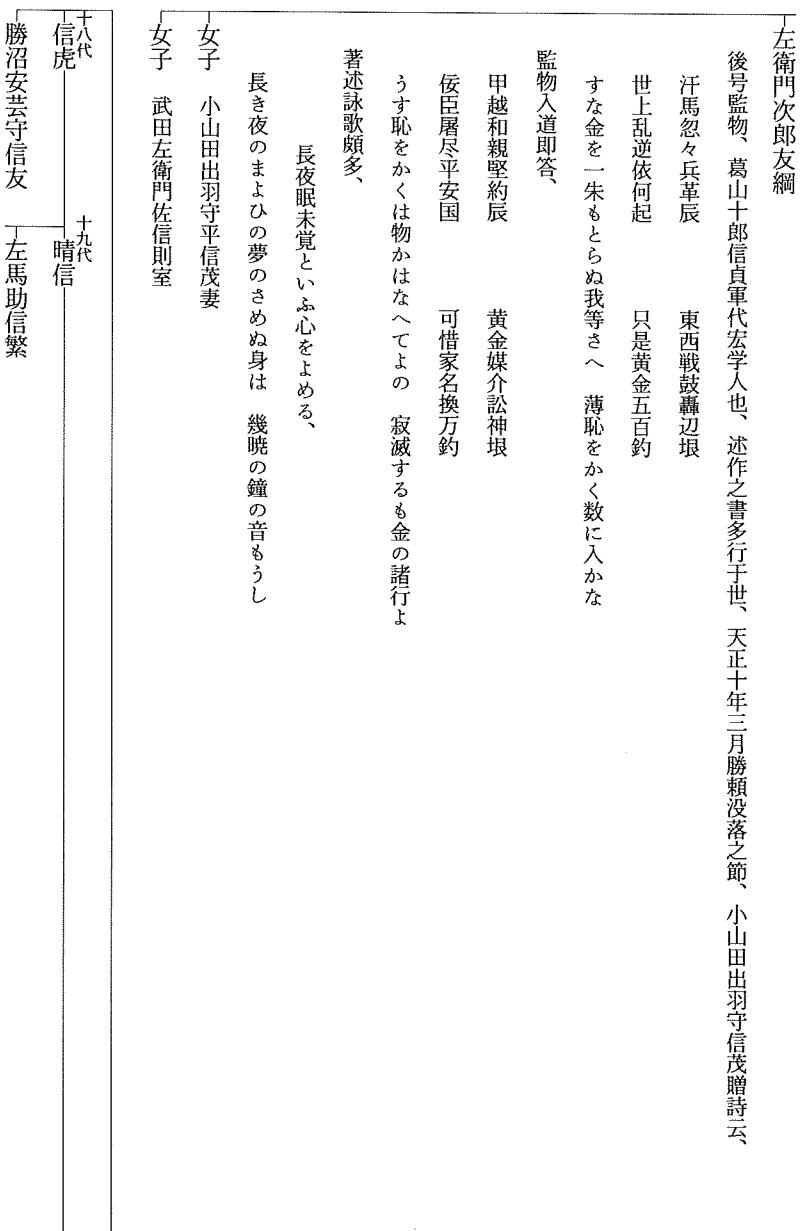
御宿左衛門佐信名

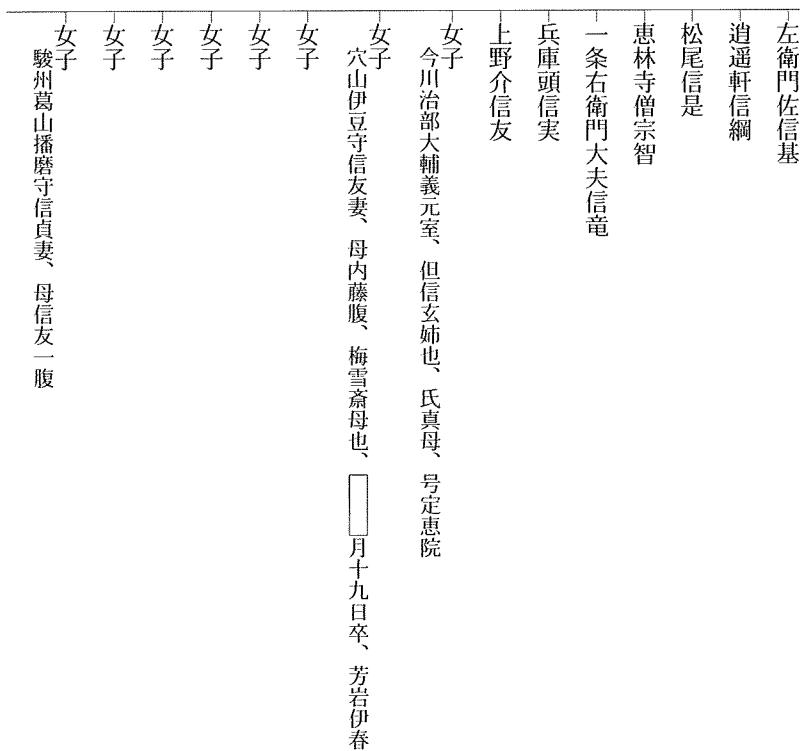
葛山右近氏友

母信虎入道少女、始屬義元、

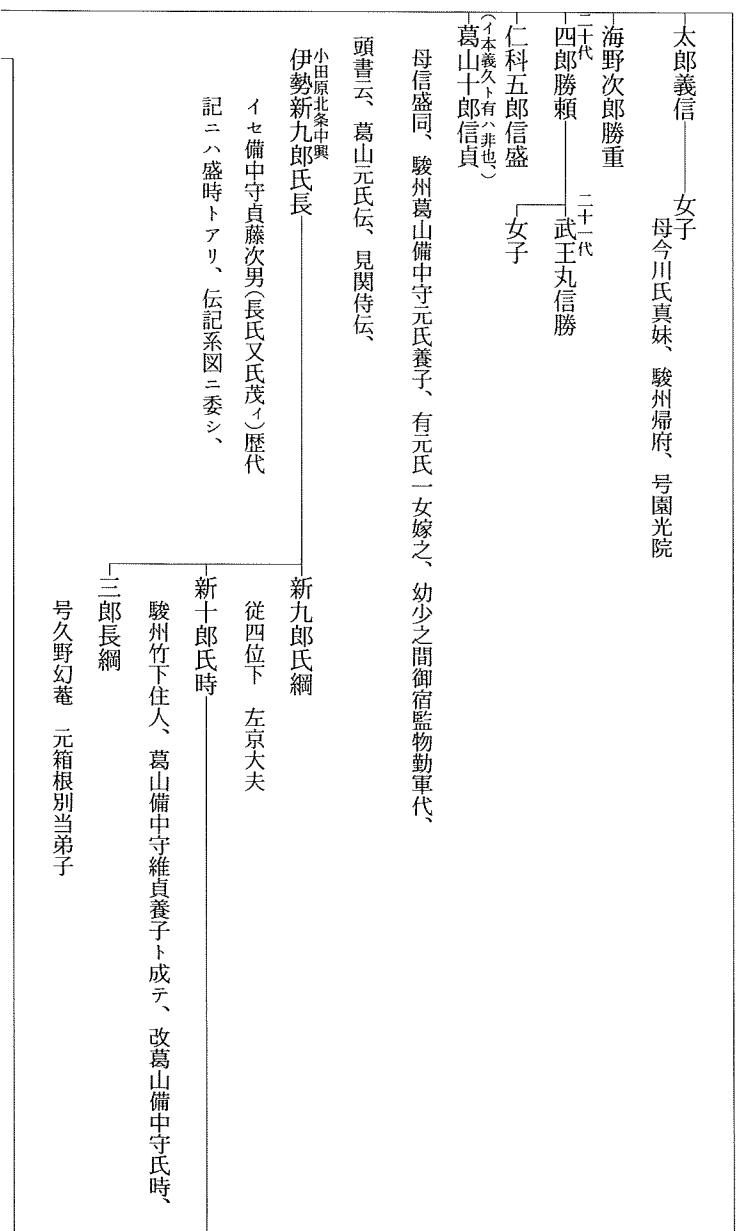
天正十年、与武田相州一廻打死、

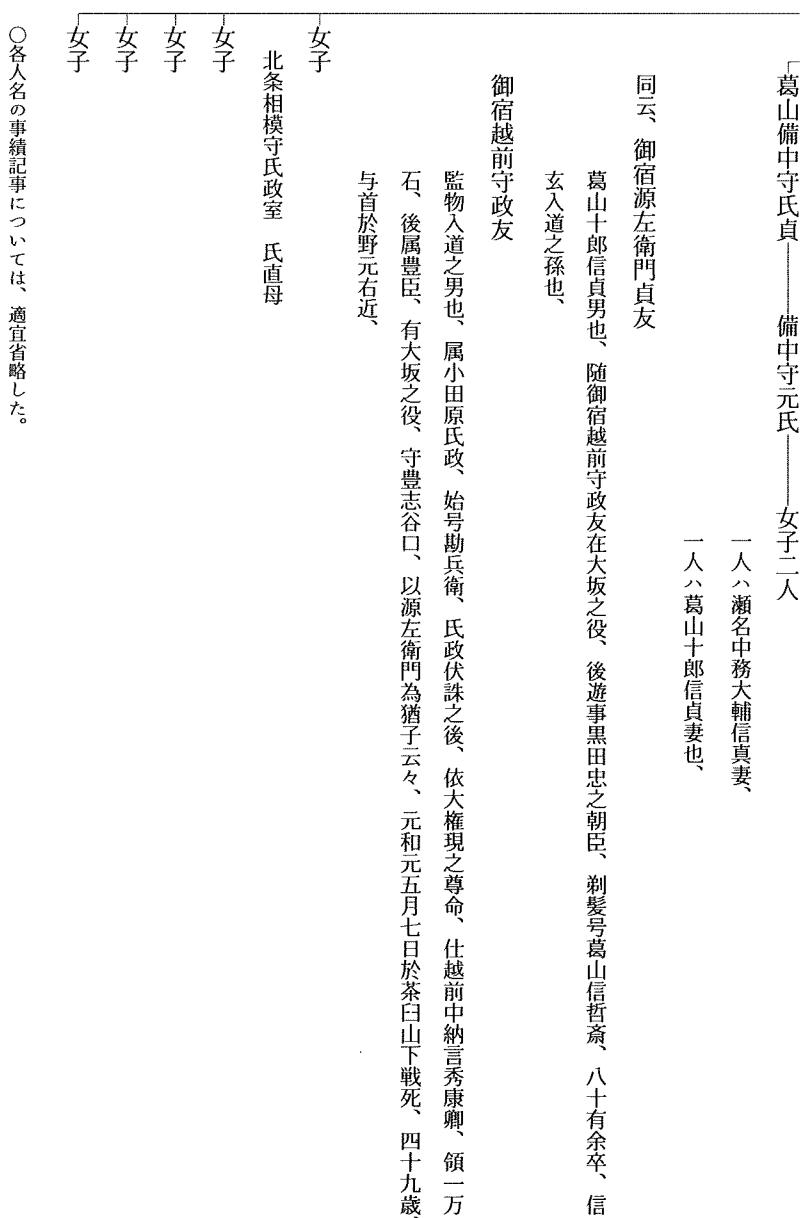
8 武田源氏一流系図





8 武田源氏一流系図





九 今川系図

今川記
○國立公文書館内閣文庫所蔵

『此系図行位紛らへしく更ニ譜の違もあり、可心得』

今川家譜

葛山氏為篤書

足利左馬頭義氏朝臣嫡子、八幡太郎義家朝臣六代也、
『●』長氏長
住三州吉良、上総介、左衛門佐、従五下

二郎滿氏

繼吉良、法名実相寺、子孫吉良系図ニ委シ、

四郎国氏今川祖、法名国光寺

太郎基氏竜王丸、義家朝臣竜目貫

劍ヲ伝、依之号竜王、

女子一人大納言顯方卿室

上野 律師義有室

次郎常氏関口祖

三郎俊氏入野祖

四郎政氏木田祖

女子那古屋室

式部太甫頼國天輔
刑部少甫範満輔

上総介範氏早世、号慶寿寺、

伊与守貞世法名了俊

九州探題

氏兼蒲原

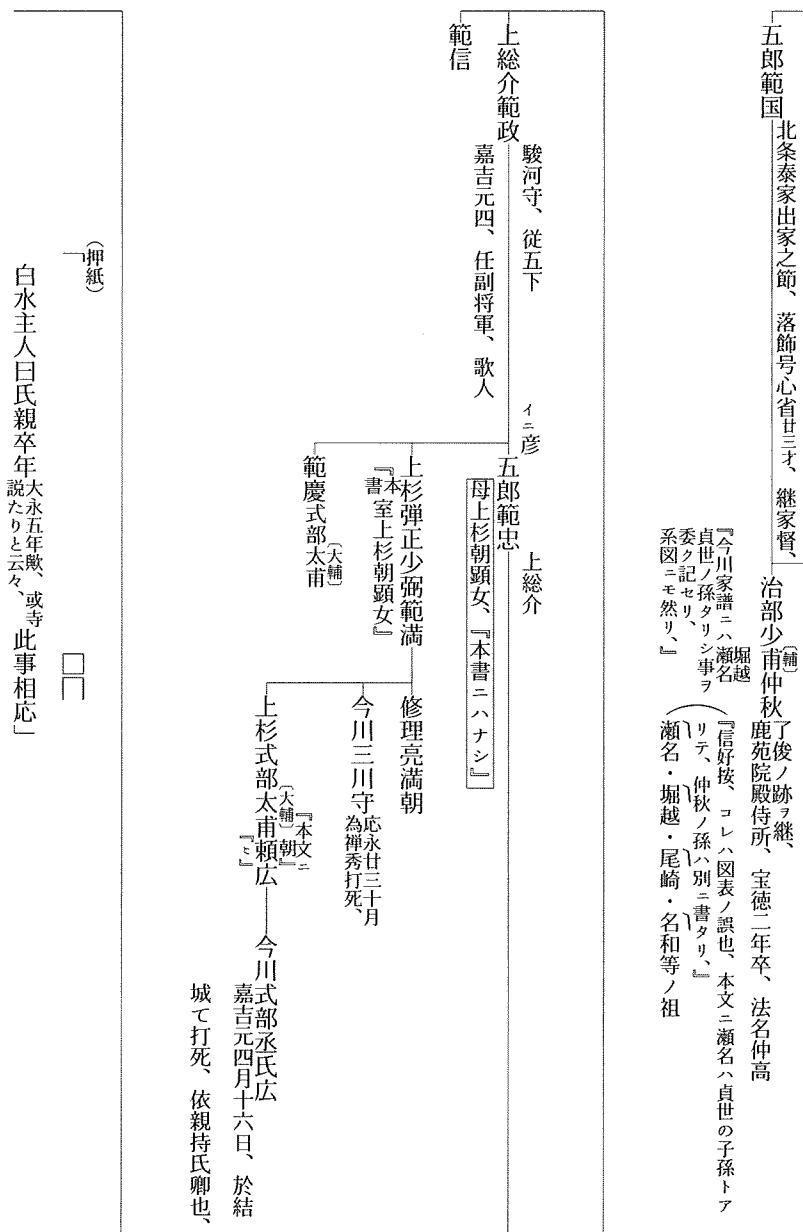
伊豆守正五位下

左京亮、子四人

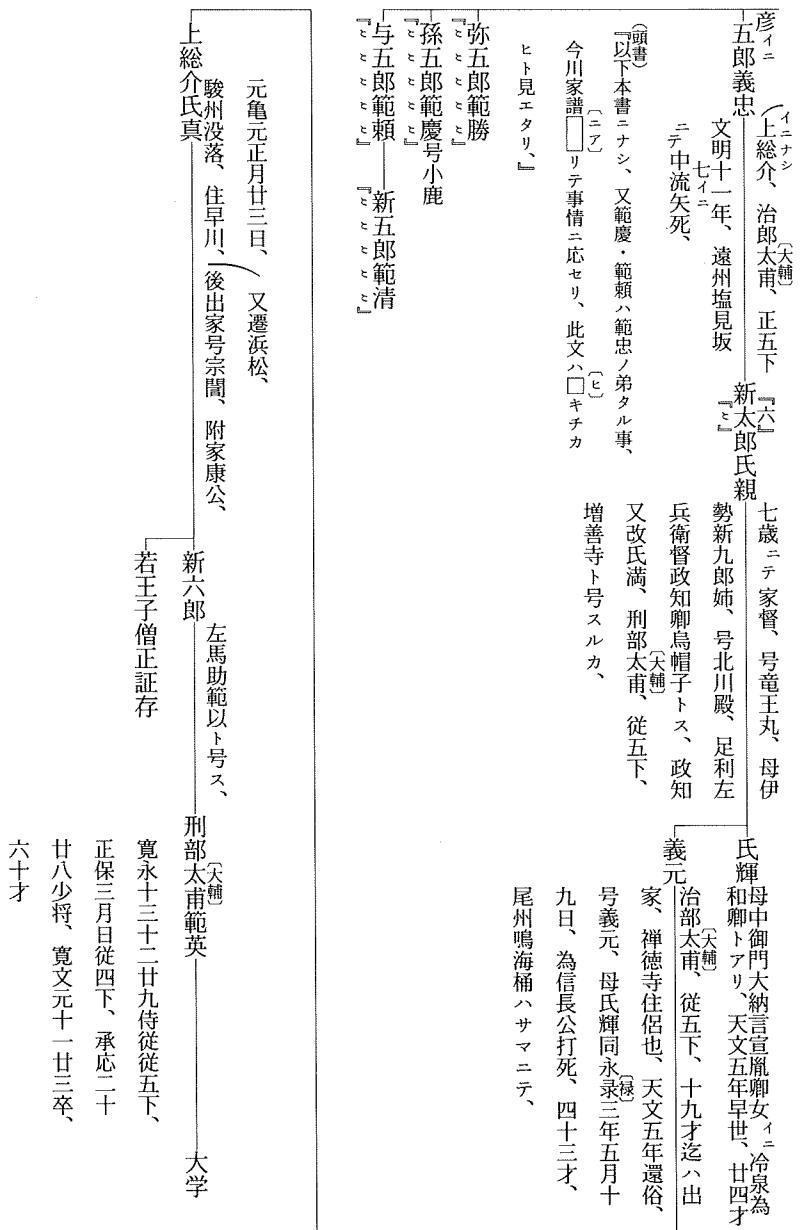
越後守家氏

仏滿禪師法折鎌倉建長寺住
続灯庵開基

越後守家氏



9 今川系図



右、今川家譜・太平記・南朝記・応仁記・嘉吉記・難太平記・松平記・関侍伝・今川系図二通等、歴覧シテ記之、且上杉系図_{〔考〕}孝合了、

正平十六年ニ鎌倉執事畠山国清か基氏に逐ハれて、伊豆の三津金山修禪寺の城に拠りし時、基氏より平一揆として攻しむ、此平一揆、葛山備中守と中あしくて、互に疑懼を懷ケルヲ、畠山か臣神保・杉原か觀知テ夜襲シカハ、戦ハスシテ退散ゼン事アリ、

按ニ、今川の大臣葛山備中守ハ、甲斐へ降りしか、此叛きしかハ殺され、此備中守か家来ともハ信玄の子ニ附ケテ、此子ニ葛山を名のらせられたり、此書の末に見えたる葛山為篤ハ、紀藩の葛山かいづれの人ならん、

扱、此書ハ今川家譜といふ物よりハ_{〔信好接ニウケカヒカタシ後ノ作ニハアラシ〕}後の作なれとも、かな目録などを集覽し候ハ詳也、此葛山備中守と云名ハ、始ニも挙クルナリ、

此書中ニ見えたる伊豆御所といふハ、文安中に上杉か足利持氏の遺孤成氏を立て、鎌倉公方と唱へしが、_{〔亨〕}亨徳中に此成氏、上杉憲忠ハ父持氏の讐也とて殺して、古河に移られ、上杉の者其と合戦ありしかば、京都將軍義政公、弟の政知を鎌倉へ下し玉ひしに、鎌倉へハえ入らで、伊豆の堀越ニ御所建てゝ、成氏を_{〔征〕}政伐せられし、此ヲ伊豆の御所と其比申せし也、政知の子茶丸殿の時ニ伊勢新九郎長氏が滅して、小田原に居城して、北条氏の故地を領して、我ハ北条の後胤也とて、北条と名のりし也、『信好接ニコレモ粗説也』

仲秋を、此書ニハ治部少輔とあれど、水戸の大日本史ニハ中務少輔と見え、又了俊に従ひ九州へ下り、菊池と戦ハれし事も見申、

氏親を此書ニハ刑部大輔とあれど、家譜にハ修理大夫と出して、此事を家の眉目なるよし載せたり、修理大夫よろしく思へる、

秦 鼎 『□ □』

『此一面の趣、評説不当、事実不精、見人不可悉用、秦鼎といふ人、是等の事ハ素一向に不知してありながら、此書のミを片はくを心得て筆記しぬれば也、此頃の書を多く見されば、とくとハ会得のしにくき事ぞかし、』

以秦子藏本写之春倅

文化六年己巳秋 於東都

寓岩信好

(朱印、印文「寓岩」)

(朱印、印文「信好」)

一〇 有井高田系図(抄出)

○裾野市公文所蔵

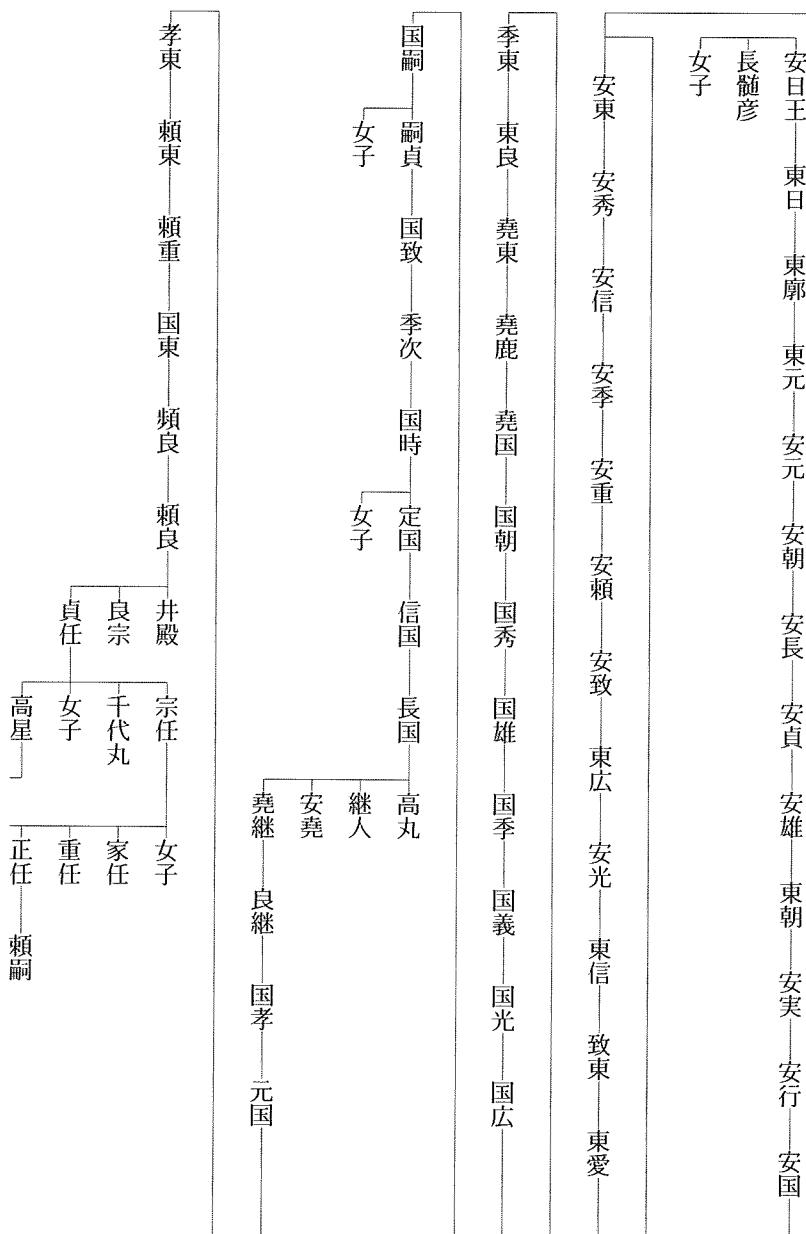
(紋章) (紋章)

・湊家之系図

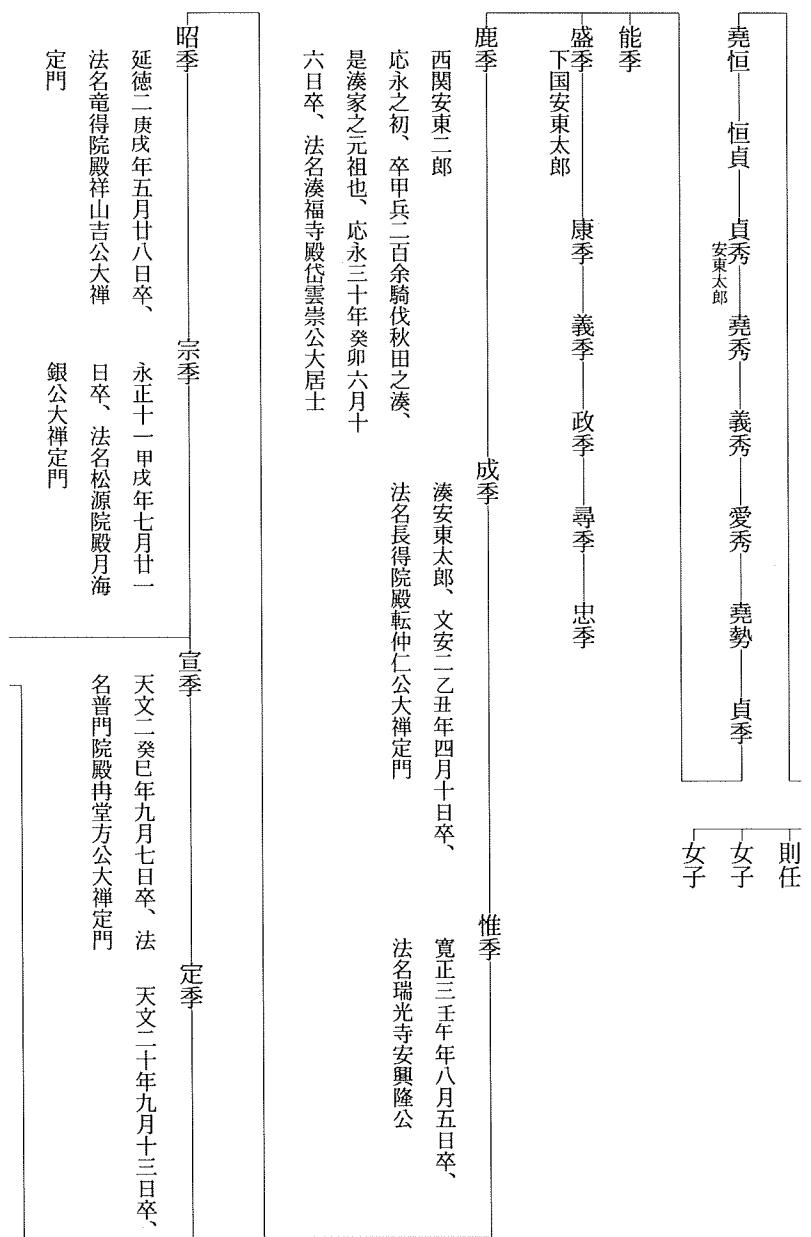
●人王第一神武天王——第二綏靖天皇——第三安寧天皇——第四懿德天皇——第五孝照天皇——第六孝安天皇

第七孝靈天皇——第八孝元天皇——第九開花天皇——第毘古命——建沼河別命

10 有井高田系図



10 有井高田系図

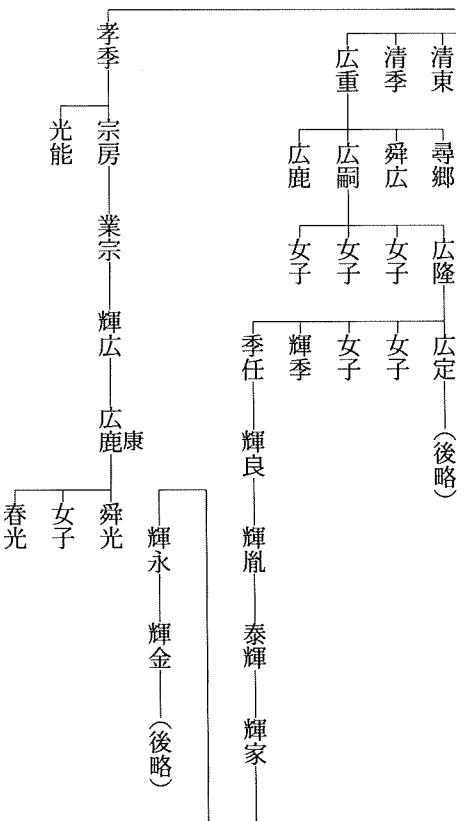




10 有井高田系図

大明神、此日毎年祀広任、天文十九
年庚戌十二月一日卒、壽八十五、法
名公文院香雲宗仲居士、後建塔於紀
州高野山甘露院、又在奥之伊達宝勝
院也、斯即高田家之元祖也、

○各人名の事績記事については、適宜省略した。



一一 高田氏歴代伝記(抄出)

○有井陽一氏所藏
○福野市公文所蔵

(表紙)

永正元甲子年

高田氏重代之旧記

十月三日 高田源五郎記

(表紙裏)

下刈右京

伝曰湊家旧臣者豊嶋休心

川尻中務

有井將監光秀伝記、湊源五郎書

当家有井將監光秀語余曰、此家之先祖ハ清和天皇八代之後胤武田太郎満義五代之孫板倉豊前守景行之末流也、伝

聞紀州熊野同姓有宇井義左衛門尉云者、元来当家之別也、

但熊野ニ而ハ字井ト書、当家ニ而ハ有井ト書也、然明応

元年九月三日之夜、下人之家ヨリ出火折ハ、艮風悪敷、

家数拾五軒同時焼却、此時当家之重宝來国光太刀、行平之大小、村政^(改カ)之脇指、武具、其外旧記之書物、系図之秘書等マテ、尽焼失ト云々、依之而余伝聞処、略記置者也、当家之先祖ハ当村之依為開祖、此屋敷開土耕地ト云、後人必可知依之、当家代々当所居住而、仕官今川家、下人門屋六軒、弥十郎・勘兵衛・半左衛門・弥右衛門・平兵衛・五左衛門等也、屋敷之内式丁余畑有、東西南三方ハ川也、北方ハ道切也、南川向下屋敷、野畠六反余、山林相続竹木無不足、子孫永可守此家、無道シテ必勿断絶、好邪欲則ハ當^家。断滅之前兆也ト云々、永正五年八月三日到大幡寺而、剃髪シテ号無塵軒、妻者甘利氏之女也、女子武人有、享禄四年辛卯六月廿五日卒去、法名無塵軒淨^元
^{八賞夢月教}屋堂清居士、光秀代甲州ヨリ高村氏来住、權左衛門ト云、

永正九年三月十日也、後人又如此書シテ可子孫伝、

湊源五郎広任伝記、広季書

國遊方、家臣豊嶋氏之末子号文次郎清治、壻人相伴中國・西国不殘歴遊、而後北越之高田住止コト三年、清治忠志甚親切也、又明應七年八月到駿州而依鈴木氏、佐野鄉家居、初暫仮名不顯、鄉人呼高田武士ト云ウ、広任因之改湊、高田源五郎ト云ウ、是高田為名字之初也、然当家光秀無嗣子。故三、鈴木氏ト相議シテ令広任仮名繼、永正元年八月二日也、示來當所住居、妻者当家光秀之実子也、永正三年丙寅二月十日受繼家督、改高田左近將監広任、同年八月豊嶋清治者武田之給人竹之内竹之内。与五左衛門者當国江尾村ニ居住ス、當根方出村杉山氏養子遣、家富子孫有、広任男子三人有、天文十三年甲辰二月分家兩所、嫡男有井源六広季ハ先祖湊家之系図相続者也、二男源七郎孝季ハ祖父光秀之繼名字、但兩家俱有井高田相交名ノル也、氏者源氏安倍氏両派也、如面語広任太歎喜、厚礼謝シテ帰國、爾來当家相続、希子孫聯綿而重先祖代々家名不失、則幸甚、合造仮嫡男タリトモ、短智淺謝之者ニハ、必不可令繼家名、決勿容私情、是余カ所欲也云々、広任天文十九年庚戌十二月朔

郷家居、初暫仮名不顯、鄉人呼高田武士ト云ウ、広任因

之改湊、高田源五郎ト云ウ、是高田為名字之初也、然当家光秀無嗣子。故三、鈴木氏ト相議シテ令広任仮名繼、永正元年八月二日也、示來當所住居、妻者当家光秀之実子也、永正三年丙寅二月十日受繼家督、改高田左近將監広任、同年八月豊嶋清治者武田之給人竹之内竹之内。与五左衛門者當国江尾村ニ居住ス、當根方出村杉山氏養子遣、家富子孫有、広任男子三人有、天文十三年甲辰二月分家兩所、嫡男有井源六広季ハ先祖

有井源六郎広季伝記、光季書

天文三年甲辰二月十日受繼家督、高田右近広季改、妻八鈴木若狭守娘也、永禄元年甲州武田ヨリ、以書中密密談之儀有、使者八郡内之小山田氏也、広季代、屋敷林之内山神之宮有、有故而深山へ遷宮、天文十五年三月十七日也、同日此所御座尾号、広季男子二人女子老人有、永禄四年辛酉九月四日卒去、法名松巖院別教自伝居士、有故而牌名奥州伊達宝勝院立、寿七十二、

高田将監光季伝記、広東書

弘治二年丙辰二月十日受繼家督、妻八渡部藏人娘也、若名大沼八五郎ト号、丹羽平左衛門佐信良、弓法之弟子也、永禄四年辛酉五月秘書等伝受終云、光季代家康公ヨリ御法度書出、肩御朱印有、天正十九年也、末渡部弥之助光殿在判留当家有、此代武田・北条数度之合戦之節損失多、

就中都倉合戦之時、為兵火之被為焼却、或盜賊度々、家運已傾、是時之不祥也、光季代佐野七ヶ村支配、小沢氏・柏木氏・仲田氏、何茂同役也、是佐野之四名云、永禄五年壬戌三月ヨリ、当村高村権左衛門組頭トナル、先祖ハ永正九年春、甲州ヨリ来、同年ノ冬、室伏助右衛門も組頭トナル、又天正元年癸酉八月、深良村ヨリ伊草伊左衛門来住居、文禄元年二月、剃髪シテ号寛照、下屋敷隠居、男子二人有、慶長三年戊戌三月十日卒、法名光林寛照庵置^(主)、此後下屋敷ヲ寛照屋敷云、同年八月三日、豆州冷川ヨリ信州ヨリ桜井四郎左衛門来住、

(後略)

○返り点・送り仮名は、原則として省略した。



